治療ゼミナール通信第６号
（２００９．７．３０）

道元、 世阿弥随想 （治療との通底）

今回は、いささか私的な連想を載せさせて頂く。少しでも治療の参考になればという思いだが、意図があまり伝わらなければすべて筆者の責任である。

１．ある夢

最近ある夢を見た。ぼんやりした不明瞭な夢だったが、たしか道元と世阿弥（世阿弥の容貌は昔映画で見た観世栄夫に似ていた）が出てきていて、両者が激しく討論したかと思うと、親しげに話しあい、特にお互い沈思黙考したりといったことであったが、途中で道元が舞を舞ったり、世阿弥が説法したり、そのうち両者が入り乱れて一体になったかと思うと煙のように天上に向かってのぼって消えてしまった。

何ともはっきりしない夢であったが、妙に気になり、通勤の電車の中でも読書に身が入らず、その夢のことばかり考え続けた。結局、私の連想はあまり展開せず「お前は道元や世阿弥を好きと言いながら、ちっとも二人のことをわかっていない。もう少し二人のことを勉強する方がいい」というようなところに落ち着いた。

しかし、生来の怠け者である私は、道元や世阿弥のことを勉強する気力は到底ないので、散っちゃっておいたところ、似たような夢を又見てしまった。これは、もう逃げるわけにはいかないと思い、せめて二人に関する自分の思い（といっても二人のことに関しては無知蒙昧なので、随分間違ったことを記してしまうかもしれないが、その点はご寛恕願いたい）だけでも整理しようと思って筆を執った次第である。

思い返してみると、私はこの二人に惹かれてきただけでなく、精神治療の面でもかなりの世話になったなという思いが込み上げてきた。夢は、その感謝の気持ちだけでもいいから文章にしてまとめろ、といってきたのかもしれない。夢の言う通りにするのも癪だが、今回はお告げに従うことにした。

２．道元との出会いに至るまで（お釈迦様の仲介）

それでは道元にいつごろ出会ったのだろう。おませだった私は、ひょっとしたら、中高時代に道元の著作に出会っていたかもしれないが、しっかりした記憶はない。大学時代にも建仁寺、興聖寺、永平寺など道元ゆかりの寺を回ったりもしたが、単なる物見遊山のお寺巡り、庭園散策だけだったように思う。

〈四諦説の教え〉

ただ、３０代前半には、はっきり道元と出会ったと言える。３０歳前にパリに留学していた頃、ギメー美術館で、インド・ネパールの曼荼羅を見て圧倒された私は、帰国後一年もたたない内にインド・ネパール行きの機会を与えられた。旅行前には私はインドのことを知りたくて、いつもの癖で、３０冊ほどの本を買い込んだ。そしてそれらの本

の中に仏教書もあった。そこで、私は、初めて初転法輪（釈迦の最初の説法）や四諦説を知り、この四諦の「苦・集・滅・道」こそが、まさに「心の病の治療の原点」であり、人間の生き方の根本をなすものだということを思い知らされた。（余談になるが、そのころはあまり嬉しくて、インドを訪れた際、釈迦が初めて説法をした初転法輪の地、鹿野苑・サールナートの地で釈迦が法を説いたその同じ場所に立って写真を撮ってもらったことを記憶している。今から考えると煩悩の塊りのような愚行であるが）

四諦の説く「苦諦」（人生は苦であるという真理）、集諦（苦悩の集・おこりは欲望にあるという真理）、滅諦（欲望への執着を滅する、欲求を無くすのではなく程々にコントロールすることで安らぎが得られるという真理）、道諦（滅諦・安らぎに達するための道という真理）は、癒しの基本であると思われた。そのころ、私は何の目的で患者と会っているのかがわからなかったし、どの精神医学の本にもその回答を求めることは出来なかったし、だいたい読んでも難解と退屈さばかりで途方に暮れていたのだが、これにより、いとも明快に我が精神医学の道が示された感があった。

考えてみると、患者（だけではなく人間全般だが）は、求不得苦、愛別離苦、怨憎会苦、五蘊取苦といった苦から、生病老死まで、四苦八苦に取り囲まれている（華厳経の四諦品によれば苦だけでも十億以上の種類があるとのことである）。さらに不幸なことには、己の苦しみの集（おこり、原因）を知らず、ましてや苦の元になる欲望の統御もできず、安らぎ（滅諦）に達することが出来ず、そこへ至る道も当然見いだせていないというそれこそ不幸で苦しい状態にある。

そうなってくると、治療とは①患者の苦しみについて話し合ったり明らかにする、②その苦しみの原因となる様々な欲求・願いなどを解明していく、②欲求をどうコントロールするか、患者にとっての安らぎとは何かを探究する、④安らぎに至る道の発見とその実践、ということに集中することだという極めて単純なことであり、そう難しく考える必要はないと考えられるようになった。そして、そういう視点で、精神医学や心理学の本を読むと読み易くなった。特に精神分析などは、苦悩と欲望の病理学そのものだと思えた。

しかし、そのように割り切ったとしても現実の治療はなかなかうまく行かない。だいたい、苦しみに向き合うどころか、苦しみについて話し合うことなぞ出来ない患者が多く、こちらの方も四苦八苦でまた途方に暮れだした。そんな時に出会ったのが道元であった。

３．道元とのふれあい

このように、私はわからぬままに患者と会い、先輩や友人に相談し、いろんな本をひもといた。その中でも、仏教書や経典は、わからぬまでも何か安らぎを与えてくれるような感じがしていた。このころ、ひたすら、古本屋で仏教書をあさり（京都の其中堂に

は随分お世話になった)、また意味も理解できないまま、観音経や華厳経や理趣経を唱えていた記憶が残っている。

〈現成公案の一節；己を学ぶことは己を忘れること〉

道元と出会ったのは、そのころであったように思う。最初にお目にかかったのは、正法眼蔵第三巻「現成公案」(真理が成る、真理の実現、真理の元型）の中の「仏道をならふといふは、自己をならふ也。自己をならふといふは、自己を忘るるなり。自己を忘るるといふは、万法に証せらるるなり。万法に証せらるるといふは、自己の身心および他己の身心をして脱落せしむるなり」という一節であった。これに出会った時の衝撃はあまりに大きく、未だに何に驚き感激したのかは分からないし、今でもうまく言えない。

ただ無理に言葉にして言うと、多分次のようなことかもしれない。

「仏道とは、まず自分の場合、治療道ということである。今まで、治療方法や治療の技術を自分とは別の何か客観的な実在として、学ぼうとしていたが、本当に学ぶべきは自分自身のことである（ラカンが、分析とは患者の分析ではなく、すべて治療者側の逆抵抗の分析である、と言ったことと通ずる)」「自分は、自分の中の逆転移を学んできたつもりであった。そこでは治療欲求と同時に治療を避けたがる逆抵抗を見つめ、逆抵抗の克服と、治療心の強化を計るべきだと思っていた」

「しかし、本当に自分を学び切るということは、そのような治療欲求や治療に執着する気持ちから離れたりする必要がある」「治療に執着する自分を忘れてこそ、本当に自由に治療的になれる」

「忘れるとは、『心を亡くす』と書くように、治療に執着する心から離れることである」「ただ、執着から離れるのは大変難しい。執着から離れられるのは、それを必要としなくなった時であろう。おそらく自己をもう学ぶ必要がないほど、治療をもう勉強する必要のないほどに、自分や治療のことを忘れるようになって初めて執着から離れ、真の治療が出来るのだろう。治療だけに執着すると、視野が狭くなり、却って反治療的になることがある」

「そして自分が忘れるぐらいになって、自然や世界と一体化でき、また自然が自己を照らしてくれる、万物、あらゆる存在が自分を証明してくれる。自分に真理を悟らせてくれる」「また万法に証せられるときはもう自分の身心のこと、自分の身体や心がどうなっているか気にかけていることもなくなる。自分の中の様々な欲求（身体的心理的欲求）にもとらわれなくなる。つまり、身心が脱落しているのである」

といったようなことではなかったか、と思われる。

〈現成公案に出会ってから〉

このように、この短い一節から様々な思いを浮かべたが、すぐさま襲ってきたのは、激しい後悔の念であった。それは、「何故、もっと早くこの一節と出会わなかったのか」

ということから始まり、「いや、こうしたことには前から気づいていたのかもしれないが、何故きちんとこれに向かい合うことがなかったのだろうか」「もしきちんと自分を見つめ、特に自分の執着と向き合っていれば、あんなにひどいノイローゼやうつにならなくて済んだのに。そして、今もう少しましな治療者になっていたのに、残念だ」といったことであった。（いずれにせよ、まともな勉強もしていないくせに、治療だけに執着していた自分に気づかされたのである）

ただ、少し経ってよく考えてみると、そうした後悔はとんでもない思い上がりであることに気づいた。すなわち「仏道・治療道を学ぶこと」「自己を学ぶこと」「自己を忘れること」「万法に証せられること」「身心脱落」というのは、とんでもない難事業であり、この一節に出会ったのは、ほんの始まりに過ぎないということなのである。私には書物や言葉や文章に頼り過ぎるという悪い癖があったが、ここでもそれが顔を出していたのである。しからば、どうすれば「仏道・治療道学習」「自己洞察」「自己忘却」「脱執着」「万法証照」「身心脱落」といったことは可能になるのか。たとえ、十分でなくても、あえて言えば、その匂いだけでも嗅ぐのはどうすればいいのか、という課題がのしかかってきたのである。（ただ、この課題に行く前に、今この一節に関してあらためて感じることは、身心脱落というリラックス状態になれば、万物証照が可能になり、万物証照が可能になれば、自己を忘れることができ、自己を忘れると一層自己を学べることになり、自己を学べると仏道・治療道は習いやすくなるというような逆方向もありかなと、妄想しているところである）

４．行の大切さ（典座教訓より）

この「治療道、自己学習」の課題を前にして、うなっていると、また道元が助けてくれた。彼は私のような凡夫の代表人のために「典座教訓」という書物を残してくれていたのである。それが「典座教訓」の中にある、中国の老僧とのやりとりである。かいつまんで述べればいいのだが、あまりの名文なので、原文をそのまま紹介する（なお、道元の文章の素晴らしさについては、機会があれば後述する）。道元が南宋に留学（1223～1227）していた時の天童山でのエピソードである。

「山僧天童に在りし時、本府の用典座職に充てりき。予因みに斉罷りて東廊を過ぎて、超然斎に赴くの途次、典座仏殿前に在って、苔を晒す。手に竹杖を携え、頭には片笠も無し。天日熱し、地甎熱し、汗流徘徊すれども、力を励まして苔を晒す。稍、苦辛を見る。背骨は弓の如く、竜眉は、鶴に似たり」ということで、道元（山僧）が老典座に年齢を聞くと六十八歳だという。そのあと、道元と老典座のやりとりが面白い。

道元「如何ぞ行者・人工を使わざる」（どうして、もう少し若い修行者達にやらせないのですか）

老典座「他は是れ。吾にあらず」（それでは自分がやることにならない）

道元「老人家如法なり。天日且つかくのごとく熱す。如何ぞ、恁地なる」（それはそうとしても、こんな暑い日にしなくてもいいのでは）
老典座「更に何れの時をか待つべき」（この今を除いていったいいつその時が来るのか）
このやり取りの後、道元の有り様は「山僧（道元のこと）、便ち、休す」となっている。すなわち、行の大切さを思い知らされて絶句したのである。
この箇所は何時読んでも新鮮で感動的である。この箇所ほど、「真実は書物の中にあるというよりは、日常の一つ一つの行動の中にあるのだ」ということを教えてくれるところはない。以後、なにかをしようとして、「面倒くさいな」と思った瞬間、「さらに、何れのときをか待つべき」という言葉が自然に出てくるようになったほどである。そして、何より日常の臨床の一つ一つがとても大事になった。患者との面接の一つ一つが大事な修行であり、有難い成長の機会であると思えるように、もっというと頑張って思おうとしていた。
このころであったと思うが、診察に夢中になって夜の十二時近くまで外来診察をして、部長から注意を受けたことがある。読者の中には、これを聞いて呆れる方もいると思うが、それはその通りである。いくら日常の行が大事だと言っても、今は、こんな無茶なことはしない。大体、体に無理がかかるし、他のスタッフに迷惑もかかるし、あまりに身勝手な行動である。
従って、今は休むのも一つの行、テニスをしたり、ピアノの練習をしたり、碁を打ったり、飲みに行ってわいわい騒ぐのもやはり一つの行、要するに「自分の好きなこと・したいこと」「自分の出来ること」「自分にとって有益であり、また他者の害にならないこと」をするのが最高の修行だと考えているし、患者にもそう勧めているが、道元からしたら「はなはだしい邪見」として一喝されそうである。いや、一喝してくれたらまだしも相手にもされないだろう。（それはともかく、私は、面接が無理ない程度であれば大好きなのだろう。ふと振り返ってみるともう精神科医になって三十五年たち、臨床心理士になって二十年が過ぎようとしている。開業して以来 18 年が経つが、この間に来院された方は、もう 9700 人を突破した。そうすると控えめに見積もっても、今までにあった患者・クライエントの数は一万五千人以上、聴いた夢の数は五万以上、面接時間が週４０～６０時間として六～七万時間の面接・診察を積み重ねたようである。いささかナルシスティックに数字を挙げさせてもらったが、これだけの面接時間をかけ、多くの患者・クライエントから貴重な教えを頂きながら、治療力があまり上がっていないのは大変申し訳ない。何より、患者・クライエントの方に申し訳ないという気持ちでいっぱいだが、今は「これから精進します」としか言いようがない。少しでも、あまり気張らず、休み休み、適度に遊んだりしながら、面接に励み、仲間たちと治療について話し合い、毎夜の夢に慰められたり警告されながら治療道を進んでいければと思っている）

５．行と座禅（活動とリラックス）

道元は、この日常の一つ一つの些細な営み、行の大切さを老典座から教えてもらったということだが、道元もこの宋の留学なども含め、日常の行の大切さを「行持」の巻をはじめ随処で記している。

ａ．行持とは？

行持とは、「日常の行を持続すること」を言うが、道元は、その「行持」の巻の冒頭で、非常に大切なことを渾身の力を込めて述べている。治療道を歩む人にとってだけでなく、生きるものすべてに大事なことが書かれているので、長文であるが、原文を引用する。長すぎて退屈・冗漫さを感じる人もいるかもしれないが、せめて道元の引き締まった名文だけでも味わってほしい。

ｂ．行持の冒頭の原文

「仏祖の大道、かならず無上の行持あり、道環して断絶せず、発心・修行・菩提・涅槃、しばらくの間隙あらず、行持道環なり。このゆゑに、みずからの強為にあらず、他の強為にあらず、不曽染汚の行持なり。この行持の功徳、われを保任し、他を保任す。その宗旨は、わが行持、すなはち十方の帀地漫天みなその功徳をかうぶる。他もしらず、われもしらずといへども、しかあるなり。このゆゑに諸仏諸祖の行持によりて、われらが行持見成し、われらが大道通達するなり。われらが行持によりて、この道環の功徳あり。これによりて、仏仏祖祖、仏在し仏非し、仏心し仏成して、断絶せざるなり。この行持によりて日月星辰あり、行持によりて大地虚空あり、行持によりて依正身心あり、行持によりて四大五蘊あり。行持これ世人の愛処にあらざれども、諸人の実帰なるべし。過去・現在・未来の諸仏の行持によりて、過去・現在・未来の諸仏は現成するなり」と言った具合であるが、あまりの迫力と凄さと清らかさにただただ圧倒されんばかりである。ちょっと一息つかしてもらうが、この極上の宝文はまだ続く。

「その行持の功徳、ときにかくれず、かるがゆゑに発心修行す。その功徳、ときにあらはれず、かるがゆゑに、見聞覚知せず。あらはれざるとも、隠れずと参学すべし。隠顕存没に染汚せられざるがゆゑに。われを現成する行持、いまの当穏に、これいかなる縁起の諸法ありて行持すると不会なりは、行持の会取、さらに新条の特地にあらざるによりてなり。縁起は行持なり、行持は縁起せざるがゆえにと、工夫参学を審細にすべし。かの行持見成する行持は、すなはち、これわれらがいまの行持なり。行持のいまは、自己の本有元住にあらず。行持のいまは、自己に去来出入するにあらず。いまといふ道は、行持より先にあるにはあらず、行持現成するを、いまといふ」

「しかあればすなはち、一日の行持、これ諸仏の種子なり、諸仏の行持なり。この行持に諸仏見成せられ、行持せらるるを行持せざるは、諸仏をいとひ、諸仏を供養せず、行持をいとひ、諸仏を同生同死せず、同学同参せざるなり。いまの華開葉落、これ行持の

見成なり。磨鏡破鏡、それ行持にあらざるなし。このゆゑに行持をさしおかんと擬するは、行持をのがれんとする邪心をかくさんがために、行持をさしおくも行持なるによりて、行持におもむかんとするは、なほこれ行持をこころざすににたれども、真父の家郷に宝財を投げ捨てて、さらに他国れいへいの窮子となる。れいへいの時の風水、たとひ、身命を喪失せしめずといふとも、真父の宝財投げつべきにあらず。真父の法財なほ失誤するなり。このゆゑに、行持はしばらくも懈倦なき法なり。」

此のあと、釈迦を初めとする多くの仏祖の行持をが述べられるが、私の限界をはるかに越えるので、このへんにしておく。

さて、このような超名文に解説や私見なぞを述べるのはおもはゆいが、しかしながらしばしの愚考を添えるのが私に課せられた行持なのだろう。

ｃ．行とは？

ただ、道元のこの「行持」の巻を考える前に、そもそもこの「行」とは何なのか？を考えてみたい。行とは、日常語でも仏教語でもあると思うが、およそ次のような意味があるのではないか、と思われる。

①行くこと

②行列、列、並ぶ、群、

③物のあるべき位置、運動の場、

④行い、勤め、修行、

⑤仏となる修行、菩薩行、

⑥行為。身・語・意の行為、

⑦戒め、徳行、

⑧観。思い、思惟し観察すること、

⑨はたらくこと、

⑩発展して進んでいく活動、

⑪造作。一切の現象世界（有為）。万物。存在するもの全て。肉体的存在。⑫五蘊（色・受・想・行・識）の一つ。即ち、意志、衝動的欲求。ついでに、色は肉体的存在、受は感受作用・感覚、想は表象作用、行は欲求、識は識別・認識作用、である。人間の活動にこの五蘊は必須であるが、またあらゆる苦しみのもとにもなる。だから五蘊取苦というのである、

⑬形成力、サンスカーラ（形成力、形成されたもの）、潜在的形成力（阿頼耶識）、意志による形成力、

⑭十二因縁（無明、行、識、名色、六処、触、受、愛、執、有、生、老死）の第二支、無明から生じた意識を生ずる働き、過去世に行った善悪の行為、⑮阿弥陀念仏を唱えること（浄土真宗の場合）、

⑯複合運動、
⑰慣習、
といったものであるが、行の複雑さ、豊かさ、奥深さが分かられた思う。

d.「行持」冒頭の愚訳、愚見

そこで、こうした行の認識をもとにしながら、道元の行持に取り組んでみよう。私が「行持」の訳に取り組むなどだいそれた愚行であるが、この治療ゼミ通信は半公半私的な文章なので、この点お許しを願いたい。一応、一文ごとに愚訳と愚見を箇条書き的に記していく。

一. 仏祖とは、お釈迦さまの前身から始まり、釈迦如来から達磨大師（インドから中国に禅をもたらした）を経て、如浄、道元へと続く五十七名の仏たちのことである。そして、そうした仏たちの大道、即ち正しい道の中には、かならず、素晴らしい言葉ではいいつくせないほどの無上の行が持続している（行の持続をここまで素晴らしく表現してくれることはとても有難い。治療行を細々と行っている私を勇気づけてくれる）

そして、その行の持続は円周のようにめぐりめぐって絶えることがない。悟りを願い求める心・菩提心を起こし、修行して、悟りを開き、涅槃という究極の「安らぎ」に入るまでその間に少しの隙間もない。完全に持続しているのである（治療行で言えば、クライエントの役に立ちたいという気持ちを発心し、そのための勉強や実践・修行を積み、ある程度の考えや仮の悟りに達し、一時の安らぎを覚えるということかもしれない。しかし、この安らぎという境地に達しても再び、発心・修行・菩提・涅槃という道はまた続くのであろう。この発心・修行、・菩提・涅槃という四大地点は、東西南北・上下左右というようにどこから始まってもどこで終わってもいい。というより始まりも終わりもなく巡り続けるということなのだろう。この四地点は、四諦の教えを連想させるが、それにしても四とは偉大な数字である。）

二. こんなふうに、行持はおのずと循環し、また素晴らしいものだから、がんばって無理してやろうとするのではなくごく自然になされるし、もちろん他のものから強制されてやるようなものではない。そして、いままで決してけがれたり汚れたりすることのないまま、行はしっかり持続している（これは、とても大事な点である。もし治療面接が他者から強いられている感じや強制された感じがしたら、どこかでその面接を負担に思っているのだろう。ただ、その時こそ、クライエントと自分の問題点を探れる絶好のチャンスではある。不曽染汚とは高潔極まりない道元らしい表現だが、汚れにまみれている私としてはまことに恥ずかしい）

三. そうして、こういう行の功徳によって自分が支えられ、他のもの・他者も支えられるのである。（治療実践、治療行はクライエントだけではなく治療者をも支える。そして、治療者が支えられると患者も支えられる。両者を正しい治療実践行が支えているの

である。面接によって自分が支えられていないと感じた治療者は自分や自分の行を見直す必要がある）
四．それだけではない、その功徳は治療者・患者の両者を越えて十方帀地即ち全世界にわたっている、というのが、保任（保ってくれると同時に行を自然に課してくるという形でわれわれを支えてくれる）の宗旨（意味）である。（もし、治療者・クライエントだけが満足し、家族といった周囲は苦しいままの不十分な状態であれば、正行が行われていないということになるだろうから、今一度自分の治療実践や行を見直すべきだろう）
五、このことは他者や自分自身も気づいていないことが多い。ただ、気づいていようが気づいていまいが、功徳は全員・全世界に及んでいるのである（行をすることは大事だが、功徳が及んでいるかどうかを気にかけてもしかたがない。人間は、つい自分に功徳がきているかどうか、良い結果や果報がもたらされているかどうかを気にするが、行や治療実践は結果だけに目を向けているのではない。行を行えることそのものが功徳なのである。結果主義から解放されることが功徳なのである）
六．このように功徳をもたらしてくれるのはわれわれの行によることが多いのかも知れないが、実は多くの仏、多くの祖師たちによって、われわれの行持も実現し（目に見える形で成る）、我々の大道（正しい道）が各所に通じていくのである（治療実践も治療行も背後で仏祖たちが支えてくれているのは有難いことである）
七．もちろん逆も言える訳で、われわれが正しい行を行うことで、仏祖たちの行持も実現し、その大道も通達するのである（ここでは、仏・治療者・患者の三者の行持が相互に支え合っている様がうかがわれる。我々は患者・クライエントのためだけではなく、仏を汚さないように治療道に励みたいものである）
八．また、われわれの行持によって、道はめぐり、道をめぐることによる功徳を頂ける（道環の功徳というのは、何と有難い言葉であろう。私は今パソコンでここを打っているが、終わりを気にせず、ゆっくり打とうと思っている。行は道環で、始まりも終わりもなく円・縁をまわっているだけだからである。それにしても道元はパソコンという道具をどのように考えるのだろうか？多分、毛嫌いせず、正しいパソコン行を説いてくれると期待する）
九．この行持の力によって、ある時は仏の姿として存在し、あるいはその姿を消し、ある時は仏の心となり、またある時は仏自身となって、途切れることなくそばに居てくれる（姿を消しているからこそ、その存在が感じ取られるという気持ちになりたいものである。患者が治療者の姿が目の前になくても、治療者の存在を感じ取れるようになると治療は進んでいったことになる）
十．また行持によって、宇宙や諸天体があり、大地もその反対の虚空も、さらには依報と正法により出てきた環境世界と自分自身（即ち自然国土と人間衆生）も存在でき、ま

た、身体（地・水・火・風の四元素によって存在する）や精神（色受想行識という五蘊のこと）も存在するのである。（われわれの行が持続し、われわれの心が生き生きすることで、日月星辰、大地虚空、依正身心、国土、衆生、身体、精神を生き生きと感じ取れるのである。患者がこの行持の心を失う、即ち生き生きさを失うと、宇宙も世界も他者も自分自身も存在していないほどに感じ取れなくなる）

十一．行持は辛い修行も多いので、必ずしも皆の好むところではないかもしれないけれど、一時的に逃げても結局はそこに帰着せざるを得ないのである。（だからといって行持を無理にする必要はない。いずれ、現実が結果を教えてくれる。患者で言えば、治療行に励んだ患者が治り易いのは当然である）十二．事情は、仏様の世界でも同じで、仏たちもその各々の行持によって、諸仏になってまさに真の仏として存在できるのである（悟ったから、仏になったからといって、修行しなくていいということはなく、悟に連れて、ますます修行は厳しくなるのではと思える。これは治るに従って、責任や負担が増えることと同じである。もう少し言うと、一見悟りを得るために修行しているようだが、実は悟るとさらに厳しい修行が待っている。従って我々はより高度で豊かな行を目指して、修行しているとも言える）

この後の訳は少し簡単にする。要点をかいつまんで訳せば

「行持の功徳があらわれていても、隠れていても一生懸命参学し、仏道を学ぶべきである」（ここが、治療では難しい。治療者は、人一倍煩悩の強い人が多いので、つい結果にとらわれ、治療が進まないと熱心さを失いがちになってくる。しかし、この治療の停滞こそ、問題の核心を教えてくれるのである）

「行持が現れていないときは、どういう因縁が関係しているのか、いかなる縁起によって行持が実現するのかと考えても行持には会うことは不可能である。ごちゃごちゃ考えても、行持に会ってそれを得れるのはなにか新しい特別の条件がある訳ではない。」（大変、厳しい言葉である。行持に出会えない時、どういう訳でそうなるのか考えても仕方がないのである。治療の結果が目に見えて現れなくても、一生懸命、治療行に励むべきなのである）

「たしかに縁起は立派な行持だが、無上の行持は別に縁によっておこる訳ではないので一生懸命修行して、よく研究して仏道を学ぶことが大事である。無上の行持があらわれたり隠れたりするのは、様々な縁起によるのである。ただ、無上の行持の見成が縁起によるとしても、行持そのものは何が起ころうとそれに左右するものでないということを学ぶべきである」（繰り返し、これを説いているのは、如何に治療者が治療行を放棄しやすいか、という警告のような気がする）

「行持そのものを実現する行持は、いままさにわれわれが行っている行持そのものである」（これも、今ここでの治療行に励めということだろう）

「行持が実現する瞬間を今という」（まさに豊かな今である。このような今のカイロスを生きれることは無上の幸せである）

「だから、一日一日の行持は仏となるための貴重な種であると言えるが、諸仏の行持そのものともいえる」（ここも大事。我々は治療結果をもたらす種として、治療行に励んでいるようだが、治療行を行っていることそのものが、仏という聖なる存在を実現しているのである。だから、今ここでの行持が大切なのである）

「このような行持を行わないとすれば、到底、仏の道に入れない」（あまりに厳しい言葉である。ただ、心配しなくても治療者は治療中、困難に出会うことが多いから、いずれ治療行に励まざるを得なくなるのである。もちろん、その治療行の厳しさに、「別に仏の道や治療行なぞに入りません」という人が出てきてもちっともかまわない。その人はそれはそれで、そういう人生を歩むだけであるから）

「行持はいろんな種類がある（鏡を磨いて悟るのも行持、鏡を破壊して迷うのも行持、）から、行持を怠けるのも一つの行持ではないかという言い訳をするものも出てくる」（こういう気持ちは筆者の中でも大いに生ずる。しかし、迷いと怠け、怠けと休養はどこで区別するのだろう）

「このような輩は、父（釈迦如来）の財宝（仏性）を投げ捨てて、放浪する窮子のようなものである」（道元に反抗するようだが、投げ捨てていることに気づけば、また拾うこともできるのでは）

「この故に行持は少しも怠ってはいけないのである」（これだけ言わねばならないのは、行持を怠る人が多いからなのだろう）

というように愚訳・愚見を述べさせて頂いた。

これ以上、付け加えることは蛇足もはなはだしいが、あえて感想を、二三言わせて頂く。

たしかに行は大事この上ないが、「行、行持の大切さを本当に学ぶ」ということは、先の現成公案の一節を借りると、「行を忘るる」ということであろうという気がする。「行、行」と叫んでいる間は、まだまだ「未熟な行」なのだろう。行に夢中になっていると、行を行っていることさえ忘れてしまうときがある。これは面接でもテニス・ピアノ・囲碁でも同じである。そして、大抵はこれらがうまくいかなくなったり、負けたりした時に、行を行うことはなんたる苦しいことだと、まことに勝手な思いを抱くのである。

それから、先にも述べたことと通じるが、行にも幾つかあるように思われることである。私にしても治療行からテニス行、ピアノ行、囲碁行、山歩き行、酒飲み行から、様々な楽しみの行、そしてとても大事な対人関係行、といった具合である。それから治療行の中でも、面接・診察・教育分析・スーパーヴィジョン・教育・講義・講演・文章書き・研究などいろんな行が満載している。道元も、一人坐禅する時間、経典を読む時間、説

法をする時間、そのために正法眼蔵を書く時間、弟子に対する指導、また俗世の人と会う時間などを悩んだのではないかという気がする。こんな時、道元はどうしていたのだろうか？おそらくは正法眼蔵をもっと読み込めば、わかるのだろうが、今、率直にその疑問があることだけは記しておく。

さらに、また同じ問題だが、こんなに行をして休む必要はないのかということである。あるいはリラックスする時は必要ないのかということである。あまりに行に精を出し過ぎて、体を傷めたり病気になったりするのでは？というまたせこい煩悩が顔を出す。立派な高僧であれば、「行をしているときこそ安らいでいるし、リラックスしている。行をただただ苦行と考えたり、一生懸命緊張してやらねばならないと思わざるを得ないのは、修行が全く足りないせいだ」と言われれば、それまでである。しかし、生身の体、ましてやそう強くない身体と一層弱い根性しかない私にとって、これは重大な問題である。このような疑問は、人から見たら、愚問と見えるかもしれないが、私にとっては真剣な問題である。道元は、果してそれに答えてくれるのだろうか？その結果は次項に記す。

ｅ．座禅は大安楽の法門なり

ア．座禅とリラックス

その答えになっているかどうかは分からないが道元は「座禅は習禅にあらず。大安楽の法門なり」という有難い言葉を、「座禅儀」の巻に記してくれている。筆者は、これを読んだとき、今まで座禅は一つの修行と考えていたが、「そうではない。座禅するとは多いなる安らぎと無上の楽を得れる、最高のリラクセーションでは」と思えてきた。だいたい、リラックスという言葉は、「ｒｅ（離れて）＋ｌａｘ（ゆるめる)」の合成語で「厳しい基準を離れてゆるめる」という意味があり、これは「禅の大安楽の法門」と同じことではと思われたのである。

座禅というと、寒い僧堂に集団で夜明け前から座り、ちょっとでも居眠りをしようものなら、少しでも体を動かしたら、途端に警策がとんでくるという厳しい場面が想像される。それはそれでいいし、本物の座禅というのはそういうものであると思われるが、ひとりひとり一番楽な姿勢で座禅を行ってもいいと思う。

イ．道元の座禅観（座禅は楽な条件でやった方がいい）

道元自身も座禅について「座禅は静処よろし。座辱あつくしくべし。風烟をいらしむるなかれ、雨露をもらしむることなかれ、容身の地を護持すべし。かって金剛のうへに座し、盤石のうへに座する蹤跡あり、かれらみな草をあつくしきて座せしなり。座処あきらかなるべし、昼夜くらからざれ。冬暖夏涼をその術とせり」といように身体にやさしいように座禅を勧めている。すなわち「座禅は静かなところで、足やお尻が痛くならないように厚い敷物を敷いて、風や霧や雨を入れず、身体が容易に過ごせるような場所の

確保が大事である。ダイヤモンドや岩の上で座ったという伝説もあるが、本当は草を厚く敷いて座り易くして座ったのである。座るところは明るいところがいいし、冬は暖かく、夏は涼しいのが適している」というように楽に快適に過ごすのが座禅なのである。もっと極端に、愚見を言えば、一番楽な姿勢で禅定に入ればいい。即ち、結跏趺坐や半跏趺坐が難しい人は、椅子に座って座禅を始めていいと思う。座禅とは大安楽でありリラックスなのだから。

ウ．座禅の効用（竜が水を得るがごとし）

道元はこの座禅の安楽さについてさらに詳しく「座禅は大安楽の法門なり。もし、この意を得ば、自然に四大軽安、精神爽利、正念分明、法味神を助け、寂念静楽、日用天真なり。すでに能く発明せば、謂つべし、竜の水を得るが如く、虎の山によるに似たりと」と述べてくれている。これもまた有難い尾言葉である。即ち「座禅をすると、身体（四大）は軽やかで安らかになり、精神や心は爽やかで利発になり、正しい理解力が増え、疑問が明らかになり、仏法を味わったりするだけでなく、ありとあらゆる存在（一切諸法）を味わい楽しめる。そして静かな中に清らかな楽しみを持ち、毎日が真実の人生を送れる。さらに自分でよく座禅というものを納得できれば、その理想的な座禅の姿は、竜が水を得たように勢いがあり、虎が山に潜んでいるように力に満ちて静かである姿に似ている」ということで、座禅こそ大安楽の道なのである。

エ．只管打座

こうしてみると道元は、座禅を通して、行（どうしても筆者はここから難行・苦行を連想してしまう）を勧めるだけでなく、楽やリラックスも勧めているような気がしてくる。だから、道元はどこでも常に「只管打座」（ただ、ひたすらに座れ。座禅ほよ。）」を説いているのだろう。

オ．我が瞑想（座禅）体験（呼吸の重要さ）

このような座禅体験を私は少しばかり体験させてもらった。ただし、それは「瞑想の会」という名称であったのだが、私は縁あって、ある真言密教の先生（先生は虚空蔵求聞持法という普通の人がやったら死んでしまうような難行を三回もされた方である。詳しくは田原亮演著「行に生きる」を参照のこと）に出会うという、またとない機会に恵まれ、結局そのえにしによって、この瞑想の会に二年間通わせていただいた。今思うと、その時の瞑想は、座布団の上に半跏趺坐で座り、また正身端坐して、目は半眼、そして呼吸はゆっくりと長く、特に吐く時にちから強くできるだけ長く吐ききる、というもので、座禅そのものと変わりがなかったように思う。そこでの体験はまたとない素晴らしいものであった。

カ．長呼気法の学び

不肖の弟子であった私でも学ぶものが多く、特に長呼気法（釈尊の呼吸法でもあり、

息を吐く時に長く吐く方法。「大安般守意経」に出てくる）はよかった。単に健康にいいだけではなく、気持ちが落ち着き、不思議と鬱や不安やむなしさ・苦しみに苛まれていた心が楽になる。また、高血圧、癌、心臓病、胃腸病、糖尿病、気管支喘息の予防・治療にもいいとのことである。この長呼気法は、臨床の場で患者さんにもやってもらうことがあり、なかなかの効果があるように思う。しかし、続けれる人が少ないのは残念だが、そこは一つの治療課題であろう。ただ、私自身は、この呼吸法のおかげでずいぶん助かっており、田原先生に感謝する次第である。

ｆ．苦楽は道環なり（行を学ぶとは行を忘るることなり）

ア.活動と休息は不即不離

さて、このような形で、楽を強調すると、「では寝てばかりいたり、なにもしないでボーっと座るだけでいいのだ」という輩が出てくる。これに対して言えることは、うつ病や引きこもりの患者等の例を出すとわかりやすい。かれらは、寝ていたり何もせずぼんやり過ごしているが、心の中は苦そのものである。それは彼らが納得した楽しい生活が出来ていないからである。そして、この満足した楽しさに満ちた生活をするためには、行（労働行、勉強行、だけではない。遊び行、運動行、気晴らし行なども必要である）。そして、行は苦しさが伴うことが多い。ただ、この苦しい行の結果、楽しい生活が待っていて、そして豊かで安楽な休息が待っているのである。従って、活動や行をしていない人は、休息も出来ないのである。

イ.苦楽の巡り（トロイメライの例）

これに関しては付け加えることもないと思うが少しだけ私事を述べさせて頂く。私は一年前「エリーゼのために」を発表会で弾いた後、憧れのトロイメライに挑戦しようとした。その時はあの夢見るようなメロディを自分の指で奏でられるという嬉しさ・楽しさの気持ちでいっぱいであった。しかし、それはまもなく大変な苦行となった。トロイメライの音域の広さ、リズムの複雑さ、内声部が加わることによって四音同時進行という難しさなどは私を苦しめ、一時は、初心者がこんな高度の曲に挑戦すること自体が間違っているとさえ思えてきた。しかし、不思議なことにピアノの先生に会うと、楽になるのである。

先生は努力したところは、きっちり褒めてくれ、出来ないところも「焦らなくて一歩一歩でいいのよ」という形で支えてくれた。まるで先生が治療者で私が患者のような感じであった。いや感じではない。事実そうなのだ。先生の言うことは、日ごろ私が患者に伝えていることと全くと言って同じであった。私は、計らずも、辻先生を思い出した。この治療行という難行を35年も続けて来れたのも先生のおかげであると続けて思った。

ともかくも私はピアノの先生の適切な指導故、何とか発表会にこぎつけられた。そして、発表会では、自分なりに力を出せたように思う。そして、聴いてくれていた何人か

の人から「うっとりした」「心のこもった演奏だった」ということで、この時、私は、最高の楽しみを得たのである。

ウ. 楽の位、苦の位

これで分かるように苦楽は巡っているのである。もっと別の言い方をすると、それぞれ楽の位、苦の位があって、我々は、その位をその時々の縁によって移動したりしているだけなのかもしれない。これは、ピアノだけではなく、治療面接でも、テニスでも碁にも言えることである。これら四つは上手になればなるほど楽しくなって来る。しかし、上手になろうと思った途端に、練習（うまくいかないところをただただ繰り返さねばならない苦しみはまさに苦行である）という苦行が待っているのである。苦楽は道環するのである。

エ. 行を学ぶとは行を忘るることなり

もうひとつピアノのことで言いたいのは、発表会前の緊張である。当然「うまく弾きたい」「感動を与えたい」「褒めてもらいたい」等の大変厚かましい欲求から、「せめてミスなしで弾きたい」「ミスを最小限にしたい」という願い、「ミスが多くてもいいから最後まで弾きたい」「途中で立ち往生した時には、先生の助けを借りてでもいいから最後まで弾きたい」というささやかな望み、さらには「ミスをしたり大失敗した後の心の痛手をどう修復しようか」といった、人から見たら笑えるような心配まで、ありとあらゆる煩悩に苦しんでいた。

発表前にはだんだん眠れなくなり、デパスの助けを借りるほどであった。当日は皆の前では平気な顔を装っていたが、内心は緊張による動悸・過呼吸が激しくパニック障害のようであった。

ただ、幸いなことに一曲目の「愛の夢」が比較的少ないミスで済んだので、ほっとしたこともあり、トロイメライを弾く時には変に落ち着いた気持ちでピアノに向かえた。そして、弾いている間に自分でも曲のメロディーの美しさにうっとりし（これは会場のグランドピアノが素晴らしかったことが大きいが)、弾いていることすら忘れてしまうほど、演奏に没入出来た。まさに演奏行を忘れていたのである。そして、その後しみじみと「ピアノ行を学ぶとはピアノ行を忘るることなり」ということを実感したのである。そして、発表会の緊張から解放された今、実に楽しんでトロイメライを弾いている。特に疲れた時など、瞑想と同じくらい、トロイメライの演奏が、癒しの特効薬となっている。この一年間の苦行が嘘だったかのように全く思い出せない。

その代わりと言ってはなんだが、人一倍欲張りな私はもう一つの憧れの曲、ラフマニノフのピアノコンチェルト第二番を弾こうと思い（もちろん易しくアレンジしたものである)、先生の事後承諾もあってそれに取り組んでいるが、まさに苦の位の絶頂にいるほど苦しい。何回やっても上手くいかず嫌になって投げ出したくなるという例のパター

ンが復活してきている。まさに「トロイメライの苦行は忘れたが、ラフマニノフの苦行を学び始めている」といったところである。まさに、「苦行を忘るるとは、苦行をまなぶことなり」である。

オ. 指導者の大切さ

今ピアノ行の話をいささか自己愛的に述べさせてもらったが、先述したように、ピアノに限らず、治療・テニス・囲碁・フランス語も、その行を大切にし、その行を生かすには、師匠、それも良き先生につく必要がある。良き指導者につけば、たとえ上手にならなくても、その行の意味が深まる。それでは良き指導者というのはどういう人か?それは良き治療者と同じである。生徒の役に立つことを常に考え、生徒に波長を合わせながら、手を抜かず、壁にぶち当たっている時は支え、時に厳しくポイントを突いてくれるといった人である。

ただ、そういった優れた指導者に出会うのは運のように思えるが、良運・良縁を引き寄せるのは自分自身である。また、良き指導者は忙しいことが多いが、何が何でもの気概で臨めば道は開けてくると思われる（慧可が自分の肘を切断して、達磨に弟子入りを求めた故事を思い出す。もちろんそこまでしなくてもいいが、良き指導者のもとで学べるようになるには、それだけの気概が必要ということなのだろう）。ただ、弟子が熱心にならなければいくら良き指導者としても、どうしようもない。

g. バランスの大切さ（活動と休息、行と座禅）

今、行に続いて座禅のことを述べたが、両方に共通して感じるのは、底に命が流れていることである。行も「座ること」も、実は同じもので、この「命の流れ」の表と裏の反映に過ぎないのではないかと思う。

つまりは陰陽の表現なのだろう。そして、人生を豊かに心に充実して楽しく生きるには、この活動と休息、行と座禅、緊張とリラックス、交感神経（活動・緊張神経）と副交感神経（休息・栄陽・植物神経・リラックス神経）、すなわち陽と陰のリズムを生きるということではないだろうか。活動と休息は、まさに道環しているのである。

不幸にして患者はこのバランスが取れていないことが多い。つまりは活動し過ぎて休むことを知らず倒れてしまったり（燃え尽き症候群、躁状態、精神運動興奮状態など）、また無活動ばかりで納得する動きがまったく出来ない人たち（引きこもり、意欲低下、無為、自閉、アンヘドニアなど）がほとんどなのである。　治療は、その意味でバランスやリズムや道環の回復と言える。

また治療面接の中でも、かなり進む時と、休みのときがあってもいい。その意味で中断を怖がる必要はない。治療者と会うことを避けて、独り静かに過ごすことを望んでいるのかもしれないからである。

6. 道元から学んだこと（空について）

道元から学んだことは、この「行」と「只管打座」以外に、数知れずあるように思うが正直正確に思い出せない。これは、私が道元に関する学びがあまりに浅いせいで未消化のままなので、きちんとした言葉になっていないからだろう。しかし、ここでは、寛容な読者に甘えて、思いついたことを未整理のまま連想していきたいと思う。この愚行を再び許して頂きたい。

a. 治療がうまく進まないとき（むなしさ感）

我々は、治療が思うように進まないとき、いくら頭の中で「治療の停滞や、困難に出会う時こそ、問題を深め治療のチャンスになる」と思おうとしても、自分の治療上の営みがむなしく感じられ、それを行っている自分自身まで否定的になりがちである。すなわち、自分の治療は中身がないし、何の役にも立たないし、頼りにならないし、魂や心がこもっていない、それこそ「無駄行」と感じさせられてしまう。

b. むなしさは、患者・人間全体の課題

こんな時は、自分は治療者として向いていないのではないか、治療者失格ではないか、いや人間失格ではないか、と思いがちになるが、実はこの「むなしさ」の感情こそ、患者がもっとも悩み、それに圧倒されているものである。ちょっとでも臨床やカウンセリングに携わったことのある人なら、患者・クライエントが、「自分の生活はむなしい」「自分の人生もむなしかった」「生きる意味を見いだせず苦しくて仕方がない」「こんなむなしい人生をどう生きたらいいんでしょう」「私は生まれて来なければよかった」といった悲痛な訴え・叫びを感じたことがあるだろう。

治療者、患者だけではない、このむなしさ感は、少しでも心やものを感じる人間であればその心の奥底に巣くい、始終この「むなしさ感情」「虚無感」に悩まされるのである。ニーチェも、「ツァラトゥストラ」の中で、あらゆる営みを無にしてまう小人の霊に出会って苦闘する姿を、記している。

こうした「むなしさ感」に対して我々はどうすればよいのだろうか?これに対して、道元はやはり有難い手がかりを与えてくれるのである。ただ、道元だけではなく、仏教の教えそのものが、この「むなしさ」に関して、あるヒントを与えてくれている。そこで順序として、まず仏教でいうむなしさについて、少し勉強して、ついで道元の方に移りたい。

c. 仏教の「空」について

「むなしさ」というと、から、空虚、中身や充実感の無さ、無価値といった否定的な面を感じるかもしれない。ただ、仏教のとらえ方はいささか違ってくる。仏教では、このむなしさ（空しさ、虚しさ）の「空」についてむしろ積極的な面も持たしている。それを見るために仏教が「空」をどう考えてきて来たか、見ていこう。仏教辞典によれば、「空」は、

①うつろ、中身がない、
②もろもろの事物は因縁によって生じたもので、固定的実体がないということ。
縁起しているということ。
存在しているものには、自体・実体・我などというものはないと考えること。
自我の実在を認め、あるいは我および世界を構成するものの永久の恒常性を認める誤った見解を否定すること。
無実体性。かりそめ。実体がないこと。固定的でないこと。
一切の相対的・限定的ないし固定的なわくの取り払われた、真に絶対・無限定な真理の世界。
有無等の対立を否定すること。
無箸の心、
万法の不可得の理を達する姿。
大乗仏教の根本の教え。
人空は「人間の自己の中の実体として自我などはない」とする立場で、法空は「存在するものは、すべて因縁によって生じたのであるから、実態としての自我はない」とする立場である。
固定的実体のないことを因果関係の側面からとらえた縁起に同じ。
空を何も存在しないこと、などと誤って理解することを空病という。
大乗仏教は、一切の存在を空とみつつ、同時に空でない面も見るから、不担空、すなわち中道空といえる。
（ここでは、空は、「あらゆる存在は実体がなく、縁起・関係性に過ぎない、という真理が説かれ、むしろ肯定的・積極的な意味が見られるようである。また何も存在しないというように空を誤って取ることの間違った見解が指摘されているのも面白い）
③わがものという見解のないこと、
④むなしい、効果がない、夢意義なこと、無効なこと、
⑤虚空、
⑥限られた空間、
⑦青空の空、青空の色、
⑧虚空、無為のこと、
⑨宇宙が破壊されたままであること、
⑩大地の下にある空輪
となっている。
ここで印象に残るのは、うつろ・無価値・夢意義というやや否定的な意味合いと、空は縁起・関係性で、これこそが仏教、特に大乗仏教の真理である、という肯定的見解で

ある。日頃から、「繋がりは命、交わりは財産」と思っている筆者にとっては嬉しい教えだが、おそらくは「そのような関係性の喜びに執着する心こそ、煩悩の元であり、外道の考えである」というお叱りを受けそうな気もする。

d. 道元と空華

それはともかく道元は、空についてどう述べているのか?それに少し耳を傾けてみよう。道元は「知るべし。仏道に空華の談あり、外道は空華の談を知らず。いはんや覚了せんや。ただし、諸仏諸祖ひとり空華地華の開落を知り、世界華等の開落をしれり。空華・地華・世界華の経典なりとしれり、これ学仏の規矩なり。仏祖の所乗は空華なるがゆゑに、仏世界及び諸仏の法、すなわち空華なり」と述べ、またその先で「空は一草なり。この空かならず華咲く、百草に華咲くがごとし」とも続けている。

まことに戦慄すべき圧倒的迫力に満ちた文章で、筆者はただただ感嘆するだけで、なにも付け加えることはないと思うが、それでは少し愛想が無さ過ぎるようにも思うので、愚訳を試みてみる。

「以下のことをよく知るべきである。仏の道（真理の道、治療の道、人生の道、ものの道理）には空華（空に咲く花、幻の花、これから開かれようとしている仏性、真っ白なキャンバスに描かれようとするあるいは描かれた花、目を病んだ人の見る幻覚ともとれるが、絶対の真理と取ってもいい）の教え・説法があるが、仏教以外の外道にはそのような教説はない。ましてや、空華の理解なぞ到底及ばないだろう。ただ多くの一貫して正しい仏法を伝えてきた仏たちのみが、空華や地華（地面に咲く花だが、空に咲く空華に対して、大地に咲く空華と取ってもいい）の花が開いたり、花びらが落ちたりすることをよく知っている。そして、空華、地華、世界華（世界中に咲いている花、空華とも取れるし、世界といった華と取ってもいい）が、そのまま経典である。（お経というものは、本来美しい花々、華厳が咲き乱れている極楽の世界である）。これこそ仏道を学ぶ根本原則であり、仏道修行（治療行も）は、花と共に生きる営みである。またもろもろの仏祖が乗る乗り物は、華そのもので、小乗・大乗の乗り物を超えた空華の乗り物である。だから、仏の世界、諸仏の存在や教えは、そのまま、空華である。」といったところで、続いては「空とは一本の草に例えられる。そしてこの草、この空は必ず花を開く。空華を現前させる（何という有難い言葉か。大変勇気を与えられる）。それは百草というか、あらゆる草、あらゆる空に花が咲くようなものである」といった感じである。愚訳だけでなく愚見も付け加えたがお許し頂きたい。

e. 豊かな空と貧しい空

ここで再び臨床に戻る。先述したように患者・クライエントは、しばしば、むなしさ、無価値感、否定感情を訴える。しかし、道元のこの言葉、魂説を聞けば、「空しさの中にこそ真理や華がある」ということになる。ただ、患者は苦しさに圧倒されていたり、

その他の事情により、せっかく自分の中に持っている空華や真理に気づけないのであろう。空しさ・空を生かせていないのである。

では、ここで治療者はどうすればいいのだろうか。その場合は、「空しさ」を否定的にだけ捉えずに、道元が言うように、患者の「空しさ・空」の中の花を探究すべきで、この「空しさ」に大いに関心を持つ必要がある。即ち、「空しさ」の中身、「空しさ」の背景・原因、本人の「空しさ」の歴史、「空しさ」を強めるもの、「空しさ」を」和らげるもの、「空しさ」の意義・目的（現時点で患者が「空しさ」にとらわれているということは、本人の人生の中でどういう意味を持つのか?といったこと)、「空しさ」に関連して本人は何に執着しているのか、その執着の歴史は?ということで、ここでは「空しさ」を出発点にして、治療者が大いに想像力を働かすことが、空華の探求になるのである。即ち「空しさ」こそ、その患者の理解の鍵、ひいては広く人間一般を理解・探究するキーワードとなるということで、ここでは、患者の「空しさ」に出会えたことを幸運と考えるべきである。

［波長合わせという「空華」］

だが、実際の臨床場面ではなかなかそうはいかない。患者は疲れ切っていたり、混乱していたり、絶望と不信の中にいたり、また「空しさ」を毛嫌いしたりして、とても「空」や「空華」の共同探求・共同参学といった営みについていけないことが多い。即ち、「空しさ」に釘付けになっているのである。その時は、無理をせず、患者・クライエントの状態を考慮し、如何にすれば、患者とのコミュニケーションが可能になるか考えた方がいい。つまり、患者の状態に沿っていく、クライエントとの「波長合わせの空華」を探ることが、重要で、この「波長合わせ」という空華が出発点になるのである。

［貧しい空から豊かな空へ］

もう少し、思い切った事を言えば、空は本来、無数の美しい華にあふれていて豊かで素晴らしいものなのである。換言すれば、何でも自由に描ける広大な真っ白なキャンバスであり、無限の可能性と創造性を秘めた豊饒さに満ちているのである。しかるに患者は、それに気づけない状態、いわゆる「貧弱な空」に追い込まれていると言える。従って、われわれ治療者の役目は、クライエントの、この硬直した「貧しい空」から、本来の「豊かな空」への道に向かえるように同行してあげることなのではないだろうか。

筆者は、この「空」のことを考えるたびに、心の病とは「自由性と想像性の欠如・喪失である」ということをつくづく感じさせられる。そして、患者は「空しさ」を否定的にしか捉えられない。しかし、実は「空しさの中でこそ花が開く」のであり、その開いた空華こそ、想像性・創造性・自由性なのである。

7. 脱落ということ（道元からの学びの続き）

a. 患者の持つ「脱落意識」

空しさと同じく、臨床で問題になるのは、患者・クライエントの脱落意識である。これは精神病者（一時的に精神病的部分が優勢になっている人のこと）で強いが、神経症水準でも境界例水準でも起きるし、健康な状態でも時々起きる。どういうものかというと「自分は、普通の人間から脱落している」「自分は異常な人間になってしまった」「誰からも人間扱いされなくなる」といったものである。これは患者の根の奥に深く潜んでいることが多く、いつも患者を苦しめる。その結果、折角の援助機関である「精神科医療機関」などを、却って脱落の証と取ってしまうのである。それ故、精神的治療の必要な人ほど、逆に精神科を忌避するという皮肉な且つ不幸な現象が起きるのである。従って、この脱落意識をどう克服するかが課題となるが、この脱落意識の改善は容易ではない。

b. 道元の言う「脱落」

筆者が、このように脱落意識をどうするか悩んでいる時に、道元が脱落について触れている所に出会った。それは、

「ただ、打座して身心脱落することをえよ」（真の仏法に達するためには、ただただ座禅して、身も心もすっぽり完全に抜け落ちることを体験するべきである）

「これらの等正覚、さらにかへりてしたしくあひ冥資するみちかよふがゆゑに、この座禅人、確爾として身心脱落し、従来雑穢の知見思量を切断して、天真の仏法に証会し、あまねく微塵際そこばくの諸仏如来の道場ごとに、仏事を助発し、広く仏向上の機にかうぶらしめて、よく仏向上の法を激揚す」（こうした万物の悟り、これらの万物となった仏たちが自分の身に返ってきて、たがいに親しく深く交わり通じ合うものであるから、この座禅する人は、確実に自然に身心脱落する。そして、これまで自分に染みついているもろもろの知見や思慮分別などのもたもたする雑念をことごとく断ち切って、天真といった自然そのままの純粋な仏の教えに出会える。そして、無限に多くの諸仏や如来の道場ごとに、仏の活動を助け発展させ、広大な範囲に仏向上の機縁に恵まれることになり、またひろく衆生に仏向上の法、即ち仏の境界さえ越えていき向上を続ける大真理の教えを広め、高め、発揚するのである）といった個所である。（また先に述べた、現成公案のところでの「身心脱落」も思い出していただきたい）

しかるに、道元は、脱落という言葉が大変好きだったようで、この身心脱落以外に、「超関脱落」（「一切の存在の束縛を超え、それらからすっぽり抜け落ちる」という意味だが「存在の束縛を超えるということそのものからも抜け出ている」という意にもとれる）や「透体脱落」（残す所のない解脱、全身解脱）という言葉も使っている。これを見ると、道元の言う「脱落」は、「とらわれや束縛のなさ」「解脱」「悟り」「自由自在の境地」ということで、随分と肯定的な意味合いという感じで、もっというと、仏道の究極の目的は「脱落」にあるのではと感じさせられてしまう。

c. 患者・クライエントの「脱落意識」と、道元の「脱落」の比較・連想

こうした道元の言う「脱落」に触れると、私が、日常臨床で出会う、「脱落意識」を持つ患者さんの「脱落」と、道元のそれとはかなり違うような気がした。そこで、この二つの「脱落」を比較したり、連想したりした結果、次のような愚見にたどり着いた。それは、

①「脱落」という言葉はかなり多様である。(「脱落」という語は、「抜け落ちる」という意味からも自由で、そこからも脱落しているようである)

②患者・クライエントの持つ「脱落意識」の「脱落」は、「普通の人間でありたいのに、そこから落ちてしまっている」「普通の人間扱いをしてほしいのに、そうされないできちがい扱いされている」「自分は普通の人間でありたいのに人間失格である」「自分は人間ではなく動物である」といったような、いわば狭い貧しい「脱落」である。そして、この「脱落意識」にがっちり囚われの身になっているのである。

③道元の「脱落」は、逆に、とらわれ・束縛がなく、自由自在である。つまり、自由に「自分は普通の人間であり、普通の人間以下であり、またそれ以上である」「自分は仏以下の存在だが、時には仏になったり、仏以上になれる」といった感じの融通無碍の世界である。

④従って、患者・クライエントに限らず、人間が生き易くなるには、この、貧しい狭い「脱落意識」から自由になる、つまり「脱落意識」からの束縛やとらわれから離れ、自由性を取り戻すこと、もっと言えば、狭い「脱落意識」から、広くて豊かな「脱落意識」への展開を助けることになるのだろう。そうすることで、いやそう努めようとするだけで、患者・クライエントは、自由性、想像力、創造性、人間性を取り戻していける

⑤しかし、いきなり、患者・クライエントに「正法眼蔵」を説いて聞かせても、もちろん患者・クライエントは困惑するばかりである。やはり、治療者は、道元の「脱落」から一旦、脱落し、自分自身で消化した上で、そして、患者・クライエントと波長を合わせながら、時にその波長合わせからも脱落しながら、自由自在に、脱落を追い求めていくのが大事なのだろう。

と言った連想がわいた。

ただ、以上のように考えれるようになってから、「脱落意識」を嫌がるよりは、むしろ「脱落意識」に出会うことは治療のチャンスであること、「脱落意識」があらゆる治療的営みの出発点であること、「脱落意識」を共同で掘り下げることで患者・クライエントの「生死」を大事に出来るのだと思えるようになった。これは、本当に道元に感謝する点である。

8. 仏性と無について

a. 患者の健康性（仏性）を信ずることのメリット・デメリット

治療者は、治療中、相手の健康性（仏性）が潜在的にせよあると信じて、治療することが多い。このこと自体は当たり前のことであり、別に批判されるべきことではないし、治療者の治療意欲の持続のためには、むしろ推奨されることかもしれない。しかし、例えば、重症の患者・クライエントの場合で、2,3年たっても理解が進まず、やたら破壊性や攻撃性が高まるといった事態に遭遇した時に、「この患者には果たして健康性があるのか?」という疑いが強くなり、ひどい時には治療を放棄してしまうことすらある。こうした時には、最初に健康性があると信じていたことが却って裏目に出てしまうことになりやすい。いずれにせよ、この場合に限らず、健康性の有無・程度は常に臨床では問題になる。

b. 一切衆生悉有仏性

ところで健康性とは、仏性（仏、即ち悟った人になれる可能性と一応考えておく）と同じことと考えていいが、道元もやはり仏性のことを考えている。道元は「一切衆生、悉有仏性」という仏陀の言葉を引用して、一切の衆生には、悉く仏性があるという有難いことを示してくれる。もっとも道元は「悉有は仏性である」であるといって、衆生は「悉有」の一部としているようである。私はこの辺の詳しい議論は分からないが、それでも「すべての存在、ただの石ころや塵にまで仏性である」と言い切る道元の言葉に勇気づけられる。とくに「悉有仏性」という言葉は、音楽のメロディのように心地よく耳に響くし、ある時期なぞは、常に頭の中で、幻聴のように「悉有仏性」という言葉が鳴っていて、独語のように「悉有仏性」を呟いていたことを思い出す。

c. 仏性など無い

ただ、別の個所で、道元は「悉有仏性」に反するようなことを述べているところがある。それは、道元の尊敬する唐代の禅者である趙州のことである。ある僧に「犬にも仏性がありますか?」と聞かれた趙州は、「無」と答えている。これは、私のような凡夫には一瞬、「さっき悉有仏性と言っていたではないか」という疑問を浮かばせるような箇所である。しかし、もっとびっくりするのは、その後、別の僧から同じ質問を受けた趙州は、今度は「有」と答えているのである。私は訳が分からなくなった。その点のことに関して、道元は随分と丁寧な解説を書いているが、それがさっぱりわからない。

d. 「道元脱落」と「仏性の有無」の「無さ」

そこで、私は道元には申し訳ないが、道元から離れることにした。というより道元に着いていけなくなったのである。まさに「道元脱落」「脱落道元」である。そのような気持ちになると、意外に自由になれ、次のように考えた。「いわゆる、仏性が有るとか無いとかそんなことにこだわる必要は無い。仏性は有でもあるし、無でもある。有無の対立を越えているし、実体としての有無を考えても、ほとんど意味が「無い」のだ」と思った。

次に臨床に戻って考えてみると、患者の仏性の存在に執着するのは、自由性を損なう。もちろん、仏性というものを一つの参考や指針にしながら治療を行ってもいいが、大事なことは、仏性があろうと無かろうと治療は必要な限り続けるということである。その場合、患者に仏性を感じる時もあれば、感じない時もあるだろうが、それでいいのである。仏性がある時は、ある時なりの治療を、無い時には、無い時なりの治療をすればいいのである（例えば、無仏性を感じる時には、その「仏性の無さ」を共同探究、共同参学することで、患者や治療者の理解が深まることになる)。まさに「有無は道環せり」なのである。そして悉有仏性だけでなく悉有無仏性も大事にすることが必要なのである。

9. 無常と前後際断、瞬間の永遠性、生死について

a. 治療は無常

これも臨床の営みをしていて辛く感じることだが、良いことが長く続かないという事態にしばしば直面する。例えば、ようやくのところで、大事な自覚が得られたのに、次の面接で、患者・クライエントはそれを忘れているといった場合とか、せっかく働きだしたり納得した生活を達成したのに、すぐに止めたり生活が破綻したりする、改善したかと思うと錯乱状態になって入院する。もっというと、治療が進みかけ順調に行き出したように思ったとたんに自殺する。さらにすごい例で言うと十数年による苦労の末ようやく治療が終結したその一週間後に自殺をされた場合がある。こんな時の治療者のショックは計り知れないし、何とも表現のしようがない。

ただ、これは治療者の宿命である、もっと言うと、優秀な治療者の宿命のように思えてならない。凡庸な治療者の元には、もともと重症の患者（治療が進むに従い、病が深くなり、隠された自殺の可能性が高まるといった）が来ない。そんな治療者には自分の気持ちがわかるはずはない、といち早く患者が洞察するからである。

従って、すぐれた治療者の元にそうした患者・クライエントが集まることになる。来られた治療者は、いずれ耐え難い辛さを味わわされることを覚悟の上で引き受けるのであろう。そうした患者・クライエントは当初の重症さにもかかわらず、何度も良くなることがあり、治療者を「かりそめの喜び」の方にいざなうが、より深刻な絶望を後でもたらすことが多い。そして、そうした絶望を両者が両者なりの境地で体験しながら、「生死の境」をさまよい続けるのである。

こうしたことに対して「治療者たるもの、そのぐらいの覚悟はしておくべきだ。そんな覚悟も無いなら、治療者になるべきでない」という人もいるかもしれない。確かにそうなのだろう。ただ、私個人としては、そのような覚悟を理性では大事だと思いながら，わが肉体はびくびくしているのを感じる.

治療は無常である。

b. 前後際断

この点に関して思い出すのはやはり道元である。道元は次のように言う。「たき木はいとなる、さらにかえりてたき木となるべきにあらず。しかあるを、灰はのち、薪はさきと見取すべからず。しるべし、薪は薪の法位に住して、さきあり、のちあり。前後ありといえども、前後際断せり」（薪は燃えて灰になったからといって、再び灰からまたたき木になるということにはならない。こうした現象に対して、たき木は前や先で、灰は後ろというように考えてはいけない。次のことをよくよく知っておかねばならない。薪は薪という法や存在の位にあり存在のあり方を知っているし、灰は灰の法位に落ち着いているのである。また、薪そのものを取り上げても、先や後という考え・先の古い薪や後の新しい薪という見解があり、前後ということはあるけれども、前後はすっぱり別れているのである。前後というものは確かにあるといえばあるのだが、薪のときは薪の時だけ、灰の時は灰の時だけである。前後関係はあるが、前後はすっぱりと切断されているのである。つながりは命だが、際断も命である）

「生も一時のくらいなり、死も一時のくらいなり。たとえば冬と春とのごとし。冬の春となるとおもはず、春の夏となるといわぬなり。」（生も一時の位であり死も一時の位であるとも言えるし、生は一という世界全体の位であり、それだけで完璧な状態であり、死もまた完全無欠な素晴らしい存在である。それは冬と春のようなものである。冬の時期に今は春と思わないのと同じく春の時に今を夏だと思わないのと同じことである。この生死、春夏秋冬、すべてが一時でありながら全時であり、一瞬であり永遠である）「出る息、いる息を待たざるゆえに、当体の心を臨終とさだむるなり」（人間は息を吸い続けたり、吐き続けたり出来ない。つまり、吸う瞬間、吐く瞬間に息は止まるのである。しかして出る息も吸う息も持ち続けることはできない。次の瞬間に息が止まるかもしれない。その瞬間その瞬間の息が最期の息なのである）

「生死の中に仏あれば生死なし。又云わく、生死の中に仏なければ生死にまどわず」（生と死、すなわちこの煩悩に満ちた世界の中に、悟りや正しい自覚があれば、煩悩や生死の惑いや世界の諸現象は自由にコントロールでき、生死・煩悩・世界はあってなきがごとくである。また逆に生死もただそれだけの事実で、ことさら仏の道や悟りや救いがあるわけでもないと覚悟していれば、ことさらに生や死がどうこうと大騒ぎすることもない）

c. 道元から得た学び（法位の重要性）

道元のこの言説（魂説）を借りて、臨床に戻ると、次のような連想がわいた。

①治療には、始位や中位や後位など様々な位がある。治療者はそれぞれの位で全力を尽くすべきである。といってもしたくないことや出来ないことはしないほうがいいし、逆にしたいことや出来る事をしないでおくのも仏道に反する。

②治療過程は一つの流れはあるとしてもそれらは瞬間瞬間で際断されていることも

ある。繋がり・際断は道環するのである。

③治療で、よく「入口は出口を決定する」と言われるし、その通りの面もあるが、入り口は入口であり、出口は出口であり、別の位に住していいるのである。従って入口で間違えても、中口や出口でそれなりの務めを果たしてもいい。

④治療には、生位・死位、病位・健位、生欲位・自殺位がある。それぞれ治療者は己の力を出し切るべきである。

⑤治療には、歓喜位・困難位がある。歓喜位には、治療がうまくいっていると錯覚して喜んだり、また困難位にあっては八方ふさがりだと思ったり絶望にかられたりいたずらに自責的になるかもしれないが、困難位の中に次なる改善位が含まれている可能性もよく見て、その各々の位で患者・クライエントと治療者自身の法位を参学・探究すべきである。困難位は改善位であり、破壊と建設、死と再生は道環するのである。

d. 瞬間は永遠、部分は全体

この道元の法位に触れてみて、私は昔から大好きだったランボーの「僕はみた。永遠を!海と溶け合う太陽を!」という個所を思い出した。ランボーこの一瞬に永遠を見たのだ。我々は人生の無常を嘆くが、「常でない」即ち「前後が際断されている」から多くの豊かな瞬間を持てるのである。その意味で、我々は、もう少し、無常の持つ「豊瞬」に目を向けてもいいのではないだろうか。そして、ランボーの体感したこの瞬間を毎日の生活で持てているのである。まさに、人生に雑用なぞない。我々はこの「豊瞬」を大事に行きたいものである。

もうひとつ思ったことは、部分は全体であるということである。道元は多くの部分を説き、それがすべて「仏の悟り」につながることを示してくれている。例えば「而今の山水は、古仏の道、現成なり」とか前にも言った「悉有仏性」のところである。これは、華厳経に言う「一一微塵中仏国在安住」を思い起こさせてくれる。まさに「今、ここ」を大事にし、また「今、ここ」が永遠なる全世界と同じものであると感じて人生を送っていきたい。

［後半］道元から世阿弥へ

1. 能と世阿弥

ａ． Ｑさんの来訪

ここまで、治療や道元について述べてきた後、ある日、一人の治療者仲間Ｑさんが訪ねてきた。何でも、私のこの雑文を読んで興味をひかれたとのことであった。Ｑさんは随分年下の治療者で何でも知りたがる好奇心旺盛の人である。ただ、彼は少し知ったかぶりをしたり、自慢士であったり、軽はずみな発言をするお喋り人であるが、すぐに馬脚を現し笑いの種にされる愛すべき人物でもあるので、暇つぶしにはちょうどいい相手と思い、少し長く話し込んだ。

話は世阿弥のことが中心であったが、Ｑさんの方が話をいろんな所に飛ばすため、ちょっと訳のわからないような話になってしまったが、それでも私にとってはいろいろ勉強になった。余りに初歩的すぎる質問や、珍問・奇問・愚問や自分の知識をひけらかすような質問もあったが、私にとってはそれなりに学びを深めるいい機会になった。日頃は小うるさい存在であるＱさんだが、今回の場合は感謝している。という訳で後半は私（A としておく）とＱさんの対話録で展開することになった。読み手の益にならなければ、責任は全て私にある。

ｂ．対話の始り、世阿弥や能について

ア、道元と世阿弥

Ｑ＜今日は道元と世阿弥の関係について、お聞きしたいんですが？＞

A「それはいいですけど、まずどんなことを話しすればあなたの役に立ちそうですか?」

〈まずは、一番基本のところですが、Ａさんは道元と世阿弥かどのように関係していると思ったのですか?〉

「まず、行のことですね。道元は行を重視しましたが、世阿弥も行にあたる稽古を強調しているということ。それと双方、空や無常を徹底的に追及しているということです。ただ、道元はいささか哲学的にそれを追求し、世阿弥は無常を芸術にまで高めたという違いはあるように思いますが、それは二人の置かれた状況からすれば当然のことだったのかもしれません」

イ、空即是花、空華の芸術化・劇化

〈無常の芸術化、いいですね。なんだか「空即是色」を連想させますね。道元の空を、現実性やドラマや美に変えていった、ということでしょうか?〉

「一挙にそう言っていいかどうかわかりませんが、まあ、ゆっくり考えていきましょう。ただ空即是色は、世阿弥の場合、空即是華といってもいいかもしれません。道元が空を追求し続けたのと同じく、世阿弥は花の追求や実現に一生取り組んでいましたから。それに彼の能は随分と道元というか禅の影響を受けているようにも思いますので、それにも惹かれました」

〈何か空の世界に花を見る、というより空こそ花である、というような感じで、世阿弥は道元の「空華」を現実の世界で追求したのでしょうか〉

「そういうと何かかっこいいですが、もう少し慎重に考えていかねばならない問題で、おいおい、それについて取りあげて行きましょう」

イ、世阿弥について

ｉ春鹿の功徳

〈それは、又後で伺うとして、とりあえず、世阿弥がどんな人なのか少し教えてくれませんか〉

「あなたは、世阿弥についてどれくらいご存じなんですか」
〈すいません。世阿弥は能を始めた人であるというぐらいしか知識はないんですが〉
「世阿弥に関する本を読んだりしたことはないんですか」
〈再びすいません。怠けてまして。花伝書を持ってはいるんですが、開く暇がなくて〉
「言い訳はいいですよ。そうすると、自分で勉強する代わりに私からいろいろもらおうということですね」
〈そんなに意地悪を言わないでください。でも結局はそうなりますね〉
「あなたのいつもの厚かましさには呆れてしまいますね」
〈まあ、そう言わずに、今回は、これ（持参したお酒）に免じてお許しのほどお願い致します〉
「あっ、これ春鹿ではないですか。いやいや私の大好物をありがとう。へえ、世阿弥が興福寺や春日大社と縁があると知っていて、この春日大社の宮水で作る春鹿を持ってきてくれたんですか」
〈いや、そんなこと全く知らずにただ、A さんはお酒が好きだろうと思って買ってきただけです 〉
「いや動機はともかく、この春鹿に免じて、あなたのお相手をしましょう」

ⅱ 世阿弥の一生

〈有難うございます。それでは世阿弥について簡単に教えてください〉
「簡単という訳にはいきませんよ。しかも、世阿弥のような偉大な芸術家であれば、ちょっと語ろうとするだけで数冊分の本が必要になるぐらいなんです」
〈多分そうなんでしょうけど、そこをごく簡単にお願いします〉
「世阿弥（1363~1443）は、ご存じのように室町時代の能役者・能作者で、能の集大成をした人として知られています。
大和猿楽結崎座（後に観世座）の二代目の太夫です。幼名は鬼夜叉、藤若で、元服してから観世三郎元清となります。法名は、世阿弥陀仏（世阿弥・世阿）で、晩年は至翁、善芳とも呼ばれました。
室町三代将軍足利義満の庇護を受け、次いで観照眼の高い義持の意にかなうように、能を優美なものに洗練すると共に、能に芸術論の基礎を与えたようです。
世阿弥は若い時から苦労が多かったようですが、12,3 歳のころに義満の前で舞った能が認められ、義満の後ろ盾のもと、一挙に観阿弥・世阿弥親子は活躍の場を与えられます。
しかし、世阿弥 22 歳の時に観阿弥が駿河で急死します（一説には殺されたという話もあるようです)。ただ、意志の強い世阿弥は、父の跡をつぎ能を集大成したのです。
特に観阿弥以前のものまね中心の能から、歌舞中心の幽玄能に改変し、夢幻能という

新しい形式を完成し、能の芸術性を高めたといえます」

ウ、能について

ⅰ能とは?

〈世阿弥のすごさはあとで教えてもらうとして、そもそも能というのはどんなものなんですか?〉

「能とは、そもそも能楽の一つです。能楽は能と狂言の総称です。もともとは、平安時代の以前の猿楽から鎌倉時代の歌舞劇が生まれ、能と呼ばれます。それに対して猿楽本来の笑いを主とする演技は、科白劇の形を整えて狂言と呼ばれます。両者は同じ猿楽の演目として併演されてきましたが、明治になって猿楽の名称が好ましくないとのことで、能楽と呼ばれることになったとのことです。

能は、舞と謡いと囃子（能管という笛、小鼓、大鼓、太鼓）の三要素から成ります。出演者はシテ（主人公)、ワキ（シテの相手役)、ツレ（シテやワキに伴う助演役)、子方（子供を演ずる役）などで、その他、後見（能舞台の進行を助ける役)、地謡（合唱部分の担当）が登場します」

〈いまさら言うのも変ですが、まさに総合芸術、オペラのようなものですね〉

「そうですね、それも西洋のオペラと違って、ぐっと控えめに神秘的に演ずるところなぞは「魂のオペラ」といってもいいかもしれませんね」

〈それと、今、A さんの説明を聞いて能に対してますます興味がわいてきました。甘えて申し訳ないですが、ついでに能の歴史を簡単に教えてくれませんか〉

「そう来ると思っていました。どこまでできるかどうかわかりませんが、少しやってみましょう。私の勉強にもなるし」〈お願いします〉

ⅱ能の歴史

〈それではまず能の起源はどこに求められるのでしょうか〉「それは諸説ありますが、まず世阿弥自身の書いた「風花姿伝」を見てみましょう。それによると『それ、申楽延年の事わざ、その源を尋ぬるに、あるいは仏在所り起こり、あるいは神代より伝はるといへども、時移り、代へだたりぬれば、その風を学ぶ力、及びがたし。近頃万人のもてあそぶ所は、推古天皇の御宇に、聖徳太子、秦の河勝に仰せて、かつは天下安全のため、かつは諸人快楽のため、六十六番の遊宴をなして、申楽と号せしよりこのかた、代々の人、風月の景を借って、この遊びの中だちとせり。その後、かの河勝の遠孫、この芸を相続きて、春日・日吉の神職たり。よって和州、江州の輩、両社の神事に従ふ事、今に盛んなり』となっています」

〈すいません。説明してください〉

「世阿弥が言うには、能の源を探っていくと、インド（仏在所）という説もあれば、日本の神代からあったという説もある。けれども時代が移ってくると、もうそのもとの姿

を学ぶことはもうできない。ただ、今皆が楽しんでいる猿楽能は、聖徳太子が秦河勝に命じて、六十六種類の物まね芸を上演させて、それを申楽と名付けさせた。それ以来、各時代の人々が、この申楽を楽しんできた。また、秦氏はこの芸を相続し、春日大社や日吉神社の神職を勤めてきた。だから、大和や近江の猿楽芸人たちが、両神社の神事には芸をするのである。というところでしょうか」
〈少しわかりました。ただ、秦氏といえば渡来系の豪族ですよね〉
「そう、だから、もともとは中国起源のものとも言われているし、またシルクロードを通して中国に伝わった、という説もあります。世阿弥自身もいくつかの起源説を、風花姿伝の別の個所で述べています」
〈まとめてみるとどういうことになるのでしょうか〉
「そうですね。以下のように箇条書き的に述べましょうか。
①岩戸神楽が猿楽の始まりであるという説（天照大神が天の岩戸に隠れてしまって、世界が真っ暗闇になった時、アメノウズメノミコトがかなりエロティックなダンスをして皆が大騒ぎをしたので、アマテラスオオミカミが岩戸から覗いて、それで再び世界に出てきてくれた、という有名な神話に基づく。ちなみにこの時、神々の面が光により白くなったので、面白いという言葉がうまれたとのことである）
②能は、中国の古代チベット系山地民の一部が日本列島に渡り、それが日本の山地民となって、祭時などにその祖型を娯楽芸能として内在していたものである。（チベットに、ノウという名の仮面劇があるとのことである）
③奈良時代に大陸から伝えられた「正楽」が日本の宮廷で「舞楽」や「雅楽」となり、「散楽」（軽技・曲芸、手品・幻術、乱舞、滑稽なものまね等）の影響が、「田舞」（土着の神祭りを含む歌舞）を吸収して、11~12 世紀には猿楽・申楽になったと思われる。（散楽は中国の雑芸にあたり、シルクロード由来といわれている。申楽が散楽の歌舞の系統をひくのに対し、田楽はその曲芸の系統をひくとされている）
④古代インドで釈迦の説法を妨害しようとした異教徒たちに猿楽のような芸を見せたところ、それにつられて、釈迦の説法は妨害されることなく続けられた、
⑤先述した秦河勝が起源とする説（聖徳太子が、天下に騒乱があった時、河勝が六十六番のものまねをさせたところ、天下が平和になった。その時、太子はその芸を残そうとして、「神楽」の神の字から「申」という部分をもらい、「楽しみを申す」という意味から、申楽とお名付けになった）
⑥村上天皇が、秦氏安（河勝から申楽の芸を受け継いでいる）に、国の平穏と民衆の安らぎや寿命長遠を祈って、六十六番の申楽を演じさせた。その後、六十六番は長いということで、三番が選ばれ、これが式三番となった。
⑦世阿弥の頃の猿楽の起源は、興福寺の維摩会（維摩経を講じる法会）の後に、異教徒

の心を和らげ、悪魔の類を鎮めるために延年の舞を行ったことにある。（興福寺で薪能という神事が行われ続けられている）
といったところでしょうか」

エ、能は癒しに通じる

〈かなり、いろんな要素が混じり合っているのが分かりました。でも、いずれにせよ、共通するところは、神への祈祷、神の怒りを鎮める、仏法に敵対する異教徒の心を鎮める、国家平安、人民快楽、寿福延長、と言った点で、なにやら、国家や自然や民のいやしを目的にしているようですね〉
「そうですね。世阿弥が完成した能を見ても、恨み・苦しさ・辛さ・さびしさ・怒りなどを和らげ、成仏できない霊を救うということが多いですから、一種のたましずめ・鎮魂という面もありますね」
〈何か、癒しの営み、治療劇のような感じですね。患者・クライエントの治療にも使えそうですかね〉
「あなたは、すぐそう行きたがる癖がありますが、能はそんな簡単に楽しめるものでもないし、ましてやどういう風に治療に使うのか見当もつきません。それに治療ということであれば、わざわざ能を出さなくても、音楽療法、心理劇、ダンス療法という形で、能の持っている三要素（音曲、謡い・科白・劇、舞）は、すでに行われていますよ」
〈失礼しました。ついつい調子に乗ってしまって〉

オ、能鑑賞時の眠気とその理由、豊に自由に能を楽しむためには?

「お調子乗りのあなたに、さらに聞きますが、あなたは今まで能を鑑賞したことがあるんですか」
〈いや、あることはあるんですが、実はあまり言いたくないことなんです。実は居眠りしてしまって、しかもいびきまでかいてしまって恥ずかしい思いをしたことがあるんです〉
「いや正直でいいですよ。能を見て眠気に誘われることはよくあることなんです」
〈ちょっとほっとしました。でも安心なぞしておれません。眠気を誘う理由について教えてください〉
「いろんなことがあるでしょうが、まず能の典拠となる物語についての理解がない。能というのは、舞台装置はもちろん、音曲も舞や動作も極度に抑制された表現をとりますから、あらかじめ鑑賞者の想像力に依存することが多いんです。一種の象徴劇ですから。そして、豊に想像するためには、能の物語についての正しい詳しい理解が必要なんです。第二に、能役者の科白が聞き取りにくい、聞きとっても理解しにくい、理解しても表面的な理解だけになっている。謡の文句は詩のようにすばらしいと同時に、とてつもなく複雑な構造を有しています。一語一語、一節一節にいくつかの意味があり、それらが重

層して何とも言えない神秘的文学空間を作っているのです。従って、能を豊かに見る、能に現れた人間性を深く鑑賞するには、謡いの文句に精通しておくことが要求されるでしょう。第三に、能の動作や舞などに対する一定の知識が必要です。能はちょっとした動作に多くの意味を込めていますから、その動作の意味がわからないとこれまた退屈になってくるということです」

〈これでは、眠気に誘われても不思議ではありません。何か治療面接で、クライエントの話が分かりにくくなって来ると、眠気に襲われることを思い出しました〉

「患者の話が理解しにくい時でも、ある程度患者の全体をつかんでいると、その理解しにくさに大いに興味や想像力がかきたてられるんですがね」

〈すいません。本当に治療道においても修行が足りません。ここで、また厚かましいお願いなんですが、何か一つの能楽を例にとって、せめて眠気に誘われない程度に解説してくれませんか。素人に対する能楽鑑賞の手引きのような感じで〉

「やれやれ、たいへんなことになってきましたね。でも、いいでしょう、明後日、ちょうど、『井筒』を見る予定になっているので、それを取り上げましょうか」

〈お願いします〉

2. 『井筒』鑑賞

a. 典拠;伊勢物語の中の、在原業平と紀有常娘の恋物語

「これは伊勢物語の在原業平とその妻、紀有常娘の恋物語に基づいています。業平と有常娘は、少年少女の時とても仲良しでした。

その後年が経って再開した後、互いに歌を読みあいます。業平は「筒井筒井筒にかけしまろがたけ生ひにけらしな妹見ざる間に」（あなたと遊んだ頃井筒の高さに比べた私の背丈も、あなたに会わないでいる間に、随分大きくなりましたよ）と読み、有常娘は「比べこし振り分け髪も肩過ぎぬ、君ならずして、たれか上ぐべき」（昔あなたと比べあった振り分け髪も随分と長くなりました。この髪をあなた以外の男のために結いあげようとは思いません）と返して、二人は夫婦となります。

しかしプレイボーイで多情な業平は結婚後、別の女性（河内高安に住んでおり、業平夫婦の住んでいる所から行くには立田山を越える必要がある）のもとに通うようになります。けれども、有常娘は嫉妬するどころか、夜半に出ていく夫の身を案じて「風吹けば沖つ白波竜田山、夜半には、君が一人越ゆらむ」と詠うのです。そうすると業平は有常娘がいとおしくなり、高安通いを止めたとのことです。

およそ、こうしたことを背景に、シテの有常娘が、当時を回想し、後シテでは業平の衣装を着て舞うのです。」

b. 『井筒』を読む

〈よくわかりました。しかし、業平というのは随分勝手な男ですね。女は全て自分に

なびくと思っているんですかね。それと有常娘もけなげですね。こんな歌を詠む代わりに「私を傷つけないで」というぐらい言ってもいいように思いますが〉

「有常娘が傷ついてないかどうかはわかりませんよ。とりあえず本文を読んでみましょう。便宜上、十の部分に分けます。

①ワキの登場;

在原寺で在原業平の昔をしのぶ。諸国一見の僧であるワキが登場し、在原寺で業平を偲び、「昔がたりの跡とへば、その業平の友とせし、紀の有常の常なき世、妹背をかけて弔わん」と謡います。（ここでは業平だけでなく有常娘も合わせて夫婦ともども弔おうとしています。有常と常無き世、無常とはもちろん対照をなしています。夫婦関係の無常さを暗示しているのでしょう。）

②前シテの登場;

そこへ前シテである里の女が、供えの水を汲みに来て筒井筒（筒のように丸く掘った井戸）の前で「暁ごとの閼伽の水、・・・、月も心や澄ますらん」（暁ごとにここへ来て仏に供える水を汲むと、澄んだ水に澄んだ月影が映り、私の心をも澄めてくれるようだ）と謡い、続けて「忘れて過ぎし古へを、忍ぶ顔にていつまでか、待つことなくてながらへん、・・・ただ、いつとなく一筋に、頼む仏のみ手の糸、導き給へ、法の声。」と祈ります（ここは、昔のことを忘れることができない辛さがあらわれているようです。そしていつとはなしに仏の救いを求めているようです）。

そして、最後に「迷ひをも、照らさせたまふおん誓い、・・・げにもと見えて、有明の、行くへは西の山たれど、眺めは四方の秋の空。松の声のみきこゆれども、嵐はいづくとも、定めなき世の夢心、なにの音にか覚めてまし。・・・」と嘆くのです。（ここは、衆生の迷いを照らして極楽へ導いてくださるという阿弥陀仏の御誓願は、本当だと見えて、有明の月の行方も極楽の西方浄土へと思っているが、現実は西のみならず、四方を指している。私の心の嵐はどこから来てどこへ行くとも定まっていない。この世の夢の迷いは、なにの音によって覚めたらいいのだろうか、といった感じで、極楽往生を願うも覚めることが出来ずに迷いの夢の中に苦しんでいる、我が身を嘆いているようです。）」

〈すいません。この②をまとめて説明してください〉

「まず、①でワキが登場し、つい②でシテ（この能は夢幻能なので前シテ）が、里の女として登場し、自己紹介的に今の心情を語ります。里の女と言っても有常娘を現わしていることがあきらかなような心情の告白です。つまり、業平の霊を毎朝暁ごとに弔うために思い出の井戸から、閼伽の水、即ち功徳の水を汲みに来る。早く昔のことを忘れて、西方浄土へ行きたいが、迷いの夢はなかなか覚めない、といったところでしょうか。ただ実際のところは、このシテの心の動きは非常に複雑で、今の解釈も非常に表面的なものです。能の台本の謡は、前にも言ったように象徴詩のようなものですから、鑑賞者

は、いろんな想像をしてかまわないんです」

〈しかし、そのためにはまず基礎的なところを押さえる必要がありますね〉

「ええ、今はざっとそういうことをしているんです」

③ワキ・シテの問答・応対;塚の説明

〈シテの登場の後、どうなるんですか〉

「こんどはワキがシテに素性を尋ねますが、シテは単に里のものとして、在原業平は有名な人だから、とむらっているだけ、と多くを語りません。しかし、なおもワキが追求すると、昔のことを地謡の助けと共にかたります。その要約は、名ばかりは残っている在原寺の旧跡は、すっかり荒れ古びて、庭の松も年老い、塚には雑草が生えている。この古塚こそが業平の墓なのだが、塚の上のひと叢薄が顔を出しているのは、何をほのめかしているのか、また何時頃から生えているのか、という形でまず、塚の説明をします」

〈何か、ワキが真相を明確にしようとする治療者で、シテが迷いながら告白してしまう患者・クライエントのようですね〉

「そう取ってもいいんでしょうが、シテの方もワキの助けを借りて、全部を告白して楽になりたいのかもしれません」

④シテの物語；業平と井筒の女の恋、筒井筒の話、高安通いの話

〈そのあと、どうなるんですか〉

「ワキが、さらに業平の物語を聞かせて欲しいというので、前シテは、まず、業平と有常娘の間は深い中で結ばれているのに、業平が高安の女と二道を忍んだこと、しかし『風吹けば・・・』の歌を読んで業平の心は有常娘だけに戻ったこと、業平と有常娘は少年時代、一緒に影を井戸の水に映しあったり（互いに影を水鏡）したこと、大人になって再会した時互いに『筒井筒井筒にかけし、・・・』『比べこし、振り分け髪も・・・』と詠み合ったこと、以後、有常娘は、筒井筒の女とも呼ばれるようになったということ、などを語ります」

⑤シテの中入り;シテが本性を明かして井筒の蔭に消える

〈いよいよ真相が明らかになって来ましたが、そのあと、どうなるのですか〉

「ここまで、来たらワキは当然、名を明かしてほしいと頼み、シテは『まことはわれは恋ひ衣、紀の有常娘とも・・・・・または井筒の女とも、はずかしながら我なりと・・・』と言って、井筒の陰に隠れて消えるのです。

⑥アイの物語;

アイはワキに、シテが語ったのと同じようなことを物語り、ついで、その里の女は有常娘の霊の化身だろう、と告げる

⑦ワキの待ち受け;夢待ち

ワキは『更けゆくや在原寺の夜の月、・・・、昔を返す衣手に、夢待ち添えて仮枕・・』と詠じて、夢を待ちます。

⑧後シテの登場（業平の衣装を着て）

後シテである有常娘の霊が業平の装束を着て『徒なりと名にこそ立てれ桜花、年に稀なる人も待ちけり、かように詠みしもわれなれば、人待つ女とも言われしなり、・・・』（桜はすぐ散るので、頼りにならない徒なものとして名高いけれど、一年のうちにめったに来ない人だって、私はまっていましたよ。徒なのは桜よりもあなたです。そしてこんな風に歌う私はいつのまにか、待つ女と言われることになりました。なにもかもあなたのせいです）と言いながらも業平の形見の直衣を身につけます。

⑨後シテの舞事

後シテは『ここに来て昔ぞ゛帰す。在原の。寺井に澄める、月ぞさやけき・・・』と謡いながら舞います。

⑩シテの立ち働き・結末;

井筒に我が姿を映し、懐かしむシテは最後に『月やあらぬ、春や昔と、詠めしも、いつのころぞや』『筒井筒、筒井筒、井筒にかけしまろがたけ、生ひにけらしな、老いにけるぞや、さながら見えし、昔男の、冠直衣は、女とも見えず、男なりけり、業平の面影』『見れば懐かしや、われながら懐かしや、亡夫・魄霊の姿は、萎める花の、色無うて匂い、残りて在原の、寺の鐘もほのぼのと、明くれば古寺の、松風や芭蕉葉の、夢破れて覚めにけり、夢は破れ明けにけり』というように、業平や自分自身や、その他もろもめの思い出を懐かしみます。そして、冒頭で夢から覚めぬと嘆いていたところが、覚めてしまう訳です。もっとも覚めた方がよかったかどうかはまた別問題ですが」

ｃ．能鑑賞における良質の居眠り（能を見るとは夢を見ること）

〈いや、面白そうですね。明後日の『井筒』の能、私も連れて行って下さい〉

「それはいいですが、居眠りはともかく鼾は止めてくださいね。周囲に迷惑がかかりますから」

〈今度は大丈夫です。これだけ面白い話を聞いたんですから〉

「ただね、眠気に誘われてもいいのです。というより、能の鑑賞はどこか夢を見に行くようなところがありますから。あのこの世のものとは思えない神秘的で全ての感情に染みいるような能管の音、また静かながら地上・天空・冥界にまで響くような鼓の音、極度に抑制されながらも人間の心や魂に訴えてくる謡いなどを聞いていると夢見心地になるのもいいんです。ただ、能をよくわかって深く鑑賞できる人は、気持ちの良い眠りに襲われても、肝心のところでは目を覚まし、じっくり深くその芸・能を味わえると思います。つまり、深く寝入ってしまう人に比べ、何かまどろみの中にいるという、能鑑賞から見たら、良質の眠りが出来る人です」

〈だんだん、自信がなくなりました〉
「そう、それに今話した井筒の話を覚えておれるかどうかも問題ですね。特にＱさんはせっかちですから、能のゆっくりした流れに我慢できるかどうか」
〈いや、急ぎ過ぎの私の治療にもなりますから、明後日、是非お願いします〉
「まあ、楽しみにしています」

３．能についての学び

ａ．能と心理治療（能鑑賞も治療も共同作業）

〈井筒のはなしを聞いて思ったのですが、やはり、能と心理療法は通じるところがあるように感じました〉
「それは、そうかもしれませんが、そんなに安易に結び付けれるものではないように思いますよ。でも、あなたは何かそれについて言いたそうな感じがあるので、とりあえず、Ｑさんの御説を拝聴しましょうか」
＜そういうと言いにくいんですけど。とりあえず浮かんだことを言います。まず、思ったのは、能というのは、鑑賞者に対して、能やその演能の物語に関する相当深い知識が要求されること、心理治療も同じで、治す主役は患者（鑑賞者）であり、治療のきっかけを与えてくれるのが能という劇であり、治療も能鑑賞も、患者と治療者、鑑賞者と能役者の共同作業であるということです＞
「それは当たり前のことですね。別に心理治療能に限らず、どんな営みにも通じることですよ」
〈そんな風に馬鹿にしないでください。でも負けずに言います。その共同作業ですが、やはり患者が正しい自覚と治療意欲を持ち、能鑑賞者が深い知識と感性を持っているほど、治療は進み、能鑑賞の質は高まるといったことです〉
「これも言う必要のないぐらい当然のことですね。」
〈それと、能を詳しく知れば知るほど能鑑賞が楽しくなるようですね〉
「それも当たり前です。テニスもピアノも囲碁などあらゆる営みに通ずることです。ただ、実行するかどうかが問題なんです」

ｂ．井筒に見る治療的意義

〈今は、お喋りという営みを実行させてください〉
「まあ、いいでしょう。それで後何をのたまわりたいのですか」
〈とりあえず、今聞いた井筒について、治療との関連で思ったことを述べさせてください〉
「あまり、期待はしませんが御高説を賜りましょう」
〈井筒については次のように、感じました。
①まずワキである諸国一見の僧は、現在で言う治療者に当たる。彼は諸国を巡って、い

まだ恨みや妄執に取りつかれて苦しんでいる霊達の成仏を助けているようである。これはこれでいいのだが、実は、この時代の貴族・武士・一般民衆の間に横たわる深き煩悩も癒そうとしていたのではないか？
②シテは成仏できない霊であることが多いし、救いや浄土に導いてくれる癒し人を待っている。これも、騒乱の時代にあって、生きることさえ困難な毎日を送る人々のとてつもない不安・おののき・悲しみ・絶望などに苦しんでいる姿をあらわしているのではないか？シテは現代の患者・クライエントを現わしている
③シテはまず普通の里人として現れることが多い。しかし、そこでの自己紹介は表面的なように見えて、すでに救いを求めている言葉がこぼれおちる。患者は最初は自己紹介をして悩みを訴えるも、簡単にしか言わない、或いは言えないことが多い。
④それを聞いているワキは（シテはすでにワキの存在を意識してワキに聞かせたのかもしれない）当然、シテの素性を聞くことになるが、シテは簡単には明かさない。ここらあたり、治療者が問題に迫ろうとしても、患者がためらったり、迷ったり、抵抗を示すのと似ている
⑤しかしワキはなおも追及する。しかも上手に。そして二人の対話のようになる。
井筒で例に取れは、ワキが『このように、塚に回向しているところを見ると業平ゆかりの人ではないか』と聞くとシテは『業平は有名で生きている時にですら近づけなかったのに、このように遠い世界になった今、縁もゆかりもありません』と続きます。
その後の対話を原文でいくと、
ワキ『もっとも仰せはさることなれども、ここは昔の旧跡にて』
シテ『主こそ遠く業平の』
ワキ『後は残りてさすがにいまだ』
シテ『聞こえは朽ちぬ世がたりを』
ワキ『語れば今も』
シテ『昔男の』と呟やく。
その後、地謡（シテ方に属している。井筒の場合はシテの心情を解説風に語っている）が引き継いで、古塚の荒れ具合を述べると同時にひとむらのススキが何かをほのめかしていることを謡い、『跡懐かしき景色かな』と結ぶ。ここでシテは知らず知らずの内に、ワキとの対話に連れ込まれていき、遂にシテは、地謡を借りて、業平の墓の説明をすることになる。ここは、治療者であるワキが対話上手ということだけでなく、シテは、ワキが自分の気持ちを理解してくれる人では、自分の夢を覚まさせてくれる人、西方浄土へ導いてくれる人と感じたのかもしれない。要するにシテの前意識・無意識は表現の時を待っていたのである。
⑥塚・墓の説明までしてしまうと、ここはもう真実の物語を話すしかない。この物語の

あらましは、A さんが既に述べた通りだが、有常娘の辛い気持が伝わってくる。彼女は、業平に別の愛人ができた時どう思ったのか？どんな気持ちで夫を送り出したのか?『風吹けば・・・』の歌の真意は?（一人越ゆらむ、という個所は寂しさと哀しさと空しさを連想させてくれる）業平が戻ってきたとき彼女は素直な気持ちで迎えられたのだろうか?といった様々な疑問がわいてくる。ただ、その後の少年少女時代の思い出、再開してからの歌の贈答、結婚というところは、とても微笑ましく、患者の辛い気持が癒されているようである。

⑦このあと、シテは一旦消える。治療でも重大なことを語った後、一時的に治療が中断することがある。

⑧いよいよ再開して後シテとして登場した時、業平の格好をして現れたのは昔を再現したいというだけでなく、業平を十分に思い出し尽くしたい、業平と一体化するぐらい業平を回想したい、という気持ちの表れだろう。また、その中に、稀にしか来ない業平への複雑な感情や『人待つ女』と呼ばれることの辛さ・悔しさ・空しさも表現されている。この中で謡うだけではなく、素晴らしい舞を舞いつくした、ようやく妄執の夢から覚めて経て平安を得る。いわば普遍的な無意識まで思いだしつくことによって、忘れて行けるということになっているのだろう。舞うとはその当時の肉体的感覚まで思いだしているという気がする。

⑧思い出し、ワキである治療者・理解者の前で表現し尽くすことが、この有常娘の霊には必要であった。

というようなところです〉

「まあ、そんなもんではないかという気がしますね。でも何となく陳腐な解説であるような気もしました。それと、果して簡単に心の治療といっていいのか、また有常娘の心理の読み解きもそれでいいのか、さらに簡単に普遍的無意識と言いましたが、どういうことでそれが言えるのか、という疑問もいろいろ出ましたが、もう少し私自身も勉強しておきますので、あなたの長広舌は有難く受け取っておきます」

c. 他の夢幻能に見るシテとワキの共同作業（回想, 鎮魂, 成仏, 供養、癒し等）

〈A さんの皮肉には慣れているとはいえ、きつい言い方ですね〉

「そうですか。たしかにあなたはこれだけ言うのに相当頑張ったようですが、価値のあるものでないと折角の頑張りも『色も匂ひも無かりけり』というようになりますよ」

〈では、とにかく価値あるものを目指して頑張ります。それと、この井筒の話を聞きながら思ったのですが、能というのは何か回想することで、平安や癒しや自己確認や自己忘却ということを、シテとワキが共同で行っている気がしました。〉

「厳密に言えば、両者だけの共同作業ではないですがね」

〈それはその通りです。それで、もうすこし勉強したいので、その共同作業の例をい

くつか挙げてくれませんか>
「そうですね、回想は、夢幻能の特徴ですから、少し思いついた能を述べてみます。
　ア、夕顔（五条辺りで、旅の僧の前に現れた女は源氏と夕顔の物語を語る。その後、夕顔の女の霊が後シテとして現れ、恋の乱れに心を奪われてこのような身になったので、どうか迷いを晴らして欲しいと僧に訴え、当時を回想して舞を舞う。僧は法華経を唱え、その功徳により、妄執を離れ成仏できる）
　イ、半蔀（同じ夕顔がシテだが、今度は花がテーマである。中央に置かれた立花が譬えようもなく美しい。ワキの僧が花の供養を始めると、五条辺りの女が現れ、『自分は夕顔の花』と名乗って姿を消す。僧が五条辺りへいくと夕顔の霊が、半蔀を開けて出てきて、花の縁で歌を交わした源氏との思い出にひたり、はかなく美しく舞う。やがて、夜明けと共に僧に別れを告げた夕顔は再び半蔀の中に消えていく。花の美しさにうっとりするような能。夕顔の花の精が主人公なのではとも取れる。『折りてこそ、それかともみめたそかれに、ほのぼの見えし花の夕顔』という歌が印象的）
　ウ、葵上（その夕顔を、生霊となって呪い殺したという六条御息所が、今度は車争いで負けた相手方の源氏の正妻葵上に物の怪として取りつき、葵上は病状に伏せります。現れ出た御息所は、失意の悲哀、抑えきれぬ恨み心を現わして、一旦消えます。今度は恐ろしい鬼女となって現れますが、僧の加持祈祷によって激しい闘いの末に成仏します。『瞋恚の炎は身を焦がす、思ひ知らずや思ひ知れ』というくだりは、あまりの怒り・恨み・悔しさ・寂しさ・復讐心に身を焦がされ、自分でもどうにもならなくなっている御息所の心の地獄を現わしているのでしょう。しかし、最後に『読誦の声を聞く時は、悪鬼心を和らげ、忍辱慈悲の姿にて、菩薩もここに来迎す、成仏得脱の、身となり行くぞ有難き』というところに来るとほっとします。まさに境界例の患者に見せてやりたい能の一つです）
　エ、野宮（同じく六条御息所の後の物語。ワキの僧が嵯峨野の野宮神社にやってきます。そこで昔を懐かしむ女から、今日九月七日は光源氏が御息所がいるこの社を訪れた記念の日であることと御息所の寂しい一生を語り、自分こそ御息所だと告げて、消えていく。夜もすがら、僧が弔っていると、御息所の霊が車に乗って現れる。その車は、葵上と車争いをして敗れた時の車であった。その無念・妄執からの救いを僧へ頼み、昔日を偲んで心静かに舞い、源氏の訪問のあった昔日の日々を懐かしく思い出す。しかし、生死の道に迷う自分は神の意に沿わぬであろうと述べつつ、再び車に乗って出ていく。この能の中の『花に慣れにし野々宮の、秋より後はいかならん』というところは、嵯峨野の秋のさびしさと同時に御息所の切ない孤独感・心細さを表わしているようです。また『来てしもあらぬ仮の世に、行き帰るこそ恨みなれ・・・』という所は何とも言いようのない、御息所の源氏への執着・妄念、そしてそんな気持ちを抱いてしまう自分に対

するたまらない嫌悪が出ているようです。御息所もそれに気づいているのか最後に『・・・内外の鳥居に、出で入る姿は、生死の道を神は受けずや、思うらんと、また車に乗りて、火宅の門をや、出でぬらん・・・』と謡って、さびしく車に乗って去っていきます。ここは、成仏出来てないようですが、僧に語り舞を見せたことは一つの救いとも考えられないこともありません。また、妄執を持ち続けてもいいのでは、それも生きるエネルギーになるのでは、といささか無責任な発想も湧いてきます。いずれにせよ、対象喪失に悩み続ける人は、これを見ることで少しは救われるかもしれません。ただ、怒りと鬱、妄執と寂しさ、気位の高さ・起床の強さなど、御息所は、心理治療学にとって研究すべき面白いテーマかもしれません。）

オ、玉蔓（今度は、夕顔と頭中将の間に生まれた玉蔓の物語です。ワキの僧は長谷寺の近くで、ある女と出会い、二本の杉に案内します。僧が『二本の杉の立ち所を尋ねずは、古河野辺に君を見ましや』の古歌のいわれを聞きます。この歌の意味は『二本の杉のあるところ、即ち初瀬寺をたずねなかったら、古河の野辺で、玉蔓の君と出会うことはなかったでしょう』ということです。そして、僧の問いを受けて女は玉蔓の物語を始め、筑紫から逃げてきたところ、この初瀬寺で、亡き母夕顔の侍女、右近に出会ったとき、右近が詠んだ歌であると説明し、自分は実は玉蔓の亡霊であると言って姿を消します。僧が玉蔓の霊を弔い回向していると、玉蔓の霊が現れ、恋の妄執に乱れ狂うが、やがて昔のことを懺悔して、仏の教えにすがり成仏したと見るや、僧の夢は覚めます。

これは玉蔓と右近が出あった前半の物語と、恋の妄執に狂った玉蔓の姿がややアンバランスです。玉蔓は、多くの男に思いを寄せられることはあっても、自分の方から恋に狂ったことなぞなく、ここが御息所と大きな違いです。ただ、髭黒大将と結婚したが、本当は好きな人がいてその恋にいまでも苦しんでいるのだ、と取れないことはありません。ただ、最後には『焦がるるや身より出る、魂と見るまで包めども、蛍に乱れつる、影も由なや恥づかしやと、この妄執を翻す、心は真如の玉蔓、心は真如の玉蔓、長き夢路は覚めにけり』というように成仏したようです。井筒のところでも、『夢は破れて覚めにけり』となっていますが、本当に夢から覚めることが悟りになるのでしょうか?もっともここは苦しい夢、夢の苦しさから解放されたいと取ってもいいのかもしれません）

カ、浮船（玉蔓と同様に複数の男から思いを寄せられた女性として、今度は浮船を紹介します。これは玉蔓と違って、二人の貴族に愛され、困惑・苦悩の末に自殺を図るという、宇治十帖の浮船の物語が典拠となっています。　能での展開は、いつものように前シテである里の女が、ワキの旅の僧に浮船のことを語ります。浮船は薫大将に愛され、ここ宇治の里に住んでいるが、匂宮が忍んで訪ね、浮船を宇治川に誘い出して深い契りを結んだ。薫に申し訳ないと思いつつ、匂宮が忘れられない浮船は悩み、死にたいと嘆いた末、行方不明になった。そのように語り終えた女は、自分は小野の里に住む者と名

乗って消える。
僧は小野の里で浮船の霊を弔います。そこに後シテである『浮船の霊』が現れ、思い悩んだが、弔いを受けて執心が晴れた、と言って消える、といったものです。後シテの『なき影の、絶えぬも同じ涙川、寄るべ定めぬ浮船の、法の力を頼むなり』『あさましやもとより我は浮船の、寄る方分かで漂う世に、憂き名漏れんと思い詫び、この世になくもあらばやと』と謡うところはいかにも哀れを誘います。しかし、最後に『頼みしままの観音の慈悲、初瀬のたよりに横川の僧都に、見つけられつつ小野に伴い、祈り加持して物の怪除けしも、夢の世になほ、苦しみは大比叡や、横川の杉の古き事ども、夢に現れ見え給ひ、いまこの聖も同じたよりに、弔い受けんと思いしに、思いのまま執心離れて、兜率に生まるる嬉しきと、・・・・』と結んでいるのは救われます）
{間奏曲;浮船と自殺者の心理}
「いずれにせよ、宇治十帖の中の浮船の心の動きを見てみると、自殺者の心理が本当によく分かります」
〈どんな話なのか、詳しく教えてくれませんか〉
「薫大将は、早世した大君によく似た浮船（実は腹違いの妹）を、ちょっとしたきっかけで、知ることになり、宇治の山荘にかくまわせます。しかし、色好みで名高い匂宮にその存在を知られ、薫のふりをして浮船に近付き、遂に深い仲になってしまいます。おとなしい薫に比べ、情熱的な匂宮に浮船は惹かれますが、そんな自分がたまらなく嫌になります。
そして、中君（大君の妹）や周囲の人に申し訳ない気持ちもあり、徐々に死ぬしかないと思いつめるようになるのです。
その後、『橘の小島の色はかはらじをこの浮船ぞゆくへ知られぬ』とはかない自分の身の上、心が定まらない自分を詠った後、徐々にうつ状態が重くなり、食べることさえままらなくなります。
続いて『かかる憂きこと、聞きつけて、思ひ疎み給ひなん世には、いかでか、あらむ。「いつしか」と、思ひ惑ふ親にも、「思はずに、心づきなし」とこそは、もて煩はれめ。かく、心炒られし給ふ人、はた「あだなる御心の本性」とのみ、聞きしかば、かかる程にこそあらめ。また、かうながらも、京にも隠しすえ給ひ、長らへても、思し数へむにつけては、かのうへの思はさむこと。よろず、隠れなき世なりければ、怪しかりし、夕暮れのしるべばかりにだに、かう、たずね出で給ふめり。まして、わが有様の、ともかくもあらむを、聞き給はぬようは、ありなんや』と思ひ辿ります。そして『わが心も、疵ありて、かの人に疎まれたてまつらん、猶いみじかるべし』と思ひ乱れます」
〈すいません。後半部分を解説してください〉
「浮船の気持ちを勝手に解釈すると『かかる疎ましいことを薫の君が聞きつけて私を

疎ましく思って嫌ったりしたら、そんな状態の世界に、どうして存在することができよう。死ぬしかない。

一体、いつ頃、薫の君から京への迎えが来ると思ひ悩んでいる母親にも、「思ひもよらぬほどふしだらで心の無い娘だ」と煩わしく思われ、愛想をつかされるだろう。

それはそれとして、こんなにも私に心を入れ込んでくれる匂宮も、持ち前の浮気心がお強いと聞いているので、どんなに熱烈に愛してくれても、いずれは熱が冷めて捨てられるのかもしれない。また、こんな状態で、仮に京に隠れ住んだとしても、そして、匂宮に思われたとしても、やっぱり同じことになるだろう。

またそんなに長く生きたとしても匂宮の愛人にしてもらったとしても、かのうへ(中の君)にどんなふうに思われるだろう。中の君には本当に申し訳ない。よろずのことというか何ごとも隠すことは出来ず明らかになっていくので、仮に匂宮から隠れ住んだとしても、二条の夕暮の件(二条院での夕暮れ、匂宮はふと浮船を見つけ接近しようとしたが果たせなかったことがある。薫が浮船を宇治へ匿う前の話である)のように強引に私を見つけに来るだろう』と思っていくと『自分としても、疵や間違いを犯した私が薫の君にうとまれたり、嫌われたりするのは、とても辛い』といったところでしょうか」

〈浮船がかわいそうですね。彼女は次から次へといろんな可能性を考えるがすべて悪い方向に取ってしまう。また様々な心配をし過ぎてしまう。悪いのは匂宮なのに、すべて自分の責任だと考えてしまう。そして、浮船の辛い気持ちを真から理解する人が周りにいない。また、浮船も自分から打ち明けようとしない。何か自殺に至る悪条件が全部重なっているようですね〉

「本当にそうですね。それと紫式部がここまでよく描いているというのもたいしたものです」

〈それで、この後どうなるのですか〉

「この後、浮船を京に移そうとする薫に隠れて匂宮が浮船を連れ出そうとします。そうした時に、薫の使いが来て、『浮船の身辺に男どもが通っているとのうわさがあるので注意してほしい』と浮船のおつきのものに言います。

浮船はそれを聞きつけていよいよ身の破滅だと思います。

その時の彼女の心情は『とてもかくても、一方一方につけて、うたてある事は出て来なん。我が身一つの亡くなりなんのみこそ、目安からめ。昔は、懸想する人の有様のいづれとなきに、思ひ傾ひてだにこそ、身を投ぐる例もありけれ。長らへば、かならず、憂きこと見えぬべき身の、亡くならんは、何か惜しかるべき。親もしばしこそ、嘆き給はめ。数多の子供あつかひに、おのずから、忘れ草摘みてむ。ありながら、もてそこなひ, 人笑へなる様にて、さすらへんは、まさる、物思ひなるべし』

(ともかく、こうなっては、どちらの方についていってもひどくわずらわしいことが

出てくるに違いない。私ひとりが、この世から消えるのが一番いいのだ。昔、二人の男に愛されて、どちらにも決めかね、身を投げた例もある。このまま生き長らへても、必ず苦しく辛いことしか起きないと思う。そんな私の死ぬのが何の惜しいことがあるか。母親は最初のうちは嘆き悲しむかもしれないが、たくさんの子供の世話に紛れて、忘れ草が摘まれるように忘れるだろう。これ以上生きたとしても、身を持ち崩して、人の笑いものになって流離うだけなら、死にもまさる苦しみであろう）というようなもののようです。

その後、手紙を焼いたりして自殺の準備を整え、宇治川に向かいます。ただ、その後、宇治川に向かう道中で一種のトランス、意識変性状態というか、解離状態になったようで、道端に倒れ、そこを横川の僧都に救われ、それが縁で出家することになります。」

〈解離性障害というと、浮船は健忘というか、記憶喪失に陥ったようなんですか〉

「そのようですね。しかし、この時代に記憶喪失や解離状態を描くとはやっぱり、式部はたいしたものです」

〈浮船は、何故、自殺に至らず、未遂というか、解離状態になったのでしょうか〉

「それは非常に興味深いテーマですね。やはり自殺は大罪なのでそんなことはしたくなかった、どこかに生きたい欲求があった、浮船は主体性がもうひとつなので自殺を決行する前に解離状態に陥った、どこかで誰かに救って欲しかった、紫式部の気持ちとして源氏物語のラストヒロインである浮船を出家させたかった、式部自身仏法に救いを求めていたのでは?といろいろな疑問がわいてきましたが、どうですかQさん、一度『浮船の自殺未遂と解離状態の意味』といったことをテーマに何か研究したら、どうですか？」

〈冗談も休み休みに言って下さい。でも、自分がするかどうかは別にして、解離性障害が増えている現在面白いテーマかもしれませんね〉

「冗談ではないですよ。浮船の自殺未遂、解離性障害、記憶の回復過程、出家と出家後などを研究すると、今の解離性障害の人たちの治療に役立つだけではなく、源氏物語の構造、紫式部という人間の中身、平安時代というより日本女性・日本人の心理やその歴史まで知れるようですよ」se

〈うっかりAさんに乗せられたら大変ですから、ご縁があればということにしておきます。まあ、その大研究はまた後で話題にするとして、能の方に戻ってもう少し、恋や愛や執着に苦しんだ例を挙げてくれませんか〉「では再開しましょう」

キ、采女（これは源氏物語の中の話ではなく、大和物語が典拠になっている。春日神社に参詣した僧であるワキは、神前の森に木を植える里の女に出会います。ワキの問いに前シテである女は木を植えることが春日明神の神慮によると述べ、さらにワキを猿沢の池に導き、ここで入水した采女の故事｛帝の寵愛を失って入水した采女の悲恋物語｝を

語り、実は自分が采女の幽霊であることを明かして、猿沢の池の中に姿を消す。供養する僧の前に、後ジテとなる采女の亡霊が現れ、弔いのおかげで成仏できたことを喜び、宮廷での曲水の宴を思い起こして序の舞を舞うと、御代を祝福して猿沢の池の水底に消える）

（ここでは、采女の『{帝の}初めは叡慮浅からざりしに、ほどなくおん心変はりしを、及ばずながら君を恨み参らせてこの池に身を投げ空しくなりしなり』という恨みの思いが、比較的簡単に成仏してしまいます。恨みが軽い訳ではないですが、春日大社の功徳の方が強調されているようです）

ク、江口（今度は遊女の物語です。僧が、遊郭である江口の里で、昔、西行法師が宿を乞い遊女に断られたことを思い出し、和歌を口ずさむ。すると女が現れ、実は西行の身を案じ、遊女の宿に立ち寄らないように諌めたと遊女をかばい、江口の君の幽霊だと言って、消え失せる。僧が弔っていると江口の君が現れ、身の境涯のはかなさや、この世の無常などを語りながら舞い、普賢菩薩の姿となり、西方浄土の空へと消えていく）

（西行の『世の中を厭ふまでこそかたからめ仮の宿りを惜しむ君かな』{世を厭って出家するほどのことは難しいと思いますが、僧に一夜の宿を貸して供養することぐらいは誰にでもできるはすですが、どうしてその程度の仮の宿りを惜しまれるのでしょうか}という歌に現れているように一夜の宿を断られた西行の思いに対して、女は『世を厭ふ人とし聞けば仮の宿に心留むなと思ふばかりぞ、心留むなと捨て人を、諌め申すは女の宿りに、泊め参らせぬも理ならずや』{浮世を厭って出家なすったお方と聞きましたので、こんな仮の宿・仮の世界に執着なさらぬようにと思ったまでです。別に宿を貸すのを惜しんだ訳ではありません。忠告するというかお諌めしたのは、女の宿だから泊って頂きまた執着をおこされては心配というのが断った理由です}と返しているところは興味深い点です。

その後の『十二因縁の流転は車の庭に巡るがこどく、鳥の林に遊ぶに似たり、前生また前生、かって生々の前を知らず、来世なお来世、さらに世々の終わりを弁ふることなし』{我ら衆生が十二因縁によって六道、地獄道・餓鬼道・畜生道・修羅道・人間道・天道を輪廻する有り様は庭を巡る車のように果てしなく、林に遊ぶ鳥のように浮き沈みが多く定めのない世の中に似ています。前世の前に前世があって最初の世を知りがたいし、来世の後に来世があってその終りを知ることも出来ません}

『或いは、人中天上の善果を受くといへども、顛倒迷妄して未だ解脱の種を植えず、或いは三途八難の悪趣に堕して、思に障へられて、既に発心の媒を失ふ、しかるにわれらたまたま受け難き人身を受けたりといへども罪業深き身と生まれ、ことに例少なき川竹の流れの女となる、前の世まで思ひやるこそ悲しけれ』{時にはとても善い果報を受けて、人間界や天上界に生まれることがあっても、道を誤り迷って煩悩解脱の種を植え

ることが出来ず、また或る時は悪業によって、三途、火途・血途・刀途、八難、飢・渇・寒・暑・水・火・刀・兵の悪所に落ちることもあり、その苦患に悩まされるだけで、仏道に発心するための仲立ちや機縁を失っている場合もある。そんなときせっかく私たちは、めったに生まれることのできない有難い人間として生まれて来たものの、罪業深き女人として生まれ、川竹の女のように浮き世定めなく流れ歩く遊女となってしまった。これは前世の果報の拙さによるものなのだろう}という遊女の嘆きは胸を打つものがあります。

ただ次に続く『げにや皆人は、六塵の境に迷ひ、六根の罪を作るとも、見る事、聞く事に迷ふ心なるべし』{遊女に限らず、全ての人は六塵、色・声・香・味・触・法という人を汚す迷い、すなわち六塵を感じる六つの感覚器官の中にいるので、見るここ聞くことなど感じること全てが、迷いの心の元になる}という所を詠むと、遊女の苦悩は人間万人共通のものとなってくるということになってくるようです。

ただ、その後で『面白や、実相無漏の大海に五塵六欲の風は吹かねども。随縁真如の波の立たぬ日もなし』と続く所は救いの機縁がありそうです。そして、最後に『思えば、仮の宿、心留どむなと人をだに、諌めし我なり、これまでなりや帰るとて、すなはち普賢菩薩と現れ、船は白象となりつつ、光りもともに白袴の、白雲に打ち乗りて、西の空に行き給ふ、有難くぞ覚えたる』という形で、遊女が普賢菩薩として現れてくるのです」

〈最後のシーンは感動的ですね。遊女と菩薩の関係について研究したくなりました〉

「それは面白いテーマですので途中で投げ出さずにぜひ頑張りぬいてください」

〈それと、もう一つ知りたいのですが、道元は遊女については何も言ってないのですか〉

「いや、詳しくは知りません。これも調べておいてください」

ケ、東北（今度は、恋多き女、和泉式部の物語です。京の東北院にいる僧の前に現れた女、和泉式部と軒端の梅の木の話をし、自分がこの梅の主人公だと名乗って姿を消します。夜、軒端の梅の陰で僧たちが法華経を読誦していると和泉式部の霊が現れ、遠い昔の思い出話を語り、今は歌舞の菩薩となっていることや、和歌の徳について語ります。その後、昔を偲びつつ舞い、あまりに昔がなつかしく恋しい涙を落としますが、それを人に見られるのは恥ずかしいとして方丈の中へとはいって行きます）

（これは恋の妄執などは現れず、和歌の徳と東北院の梅に焦点を当ててきれいに仕上げた作品と言えるでしょう。この中の『年月を古き軒端の梅の花、主を知れば久方の、天霧る雪のなべて世に、聞こえたる名残りかや、和泉式部の花心』と謡う所は、式部がどれだけ花を愛し、また花も式部を懐かしがっている様がうかがえるように思います。そして法華経の譬喩品を聞いて『門の外、法の車の音聞けば、われも火宅を出でにけるかも』と悟りの歌を謡うのです）

コ、通小町（今までのはどちらかといえば、女性の恋心を謡ったものが多かったですが、今度は男性の恋心と執着をテーマにしたものを二つあげます。一つは、小野小町に恋した深草少将の物語です。これは、ご存じのように小町に恋焦がれた少将が、小町から百夜通いをしたら思いを遂げさせてあげるという約束をしてもらったものの、九十九夜通い続け、後一夜残すところで息果てた、という悲しい物語に基づいています。

主人公のシテは少将の霊で、前ヅレが里の女、後ヅレが小野小町の幽霊で、小町の霊が、少将の霊の怨みに悩まされるという興味深い構成になっています。

所は八瀬の里で、僧の元に毎日木の実を届ける女がいます。僧が素性を問うと『秋風の吹くにつけてもあなめあなめ小野とは言はじ薄生ひけり』と詠って、姿を消します。

僧は女が小野小町の霊だと察し、霊を弔うと小町が現れ、受戒を得ようとします。しかし、少将の霊のシテが登場し、それに反対します。そしてシテの少将の霊は『ふたりだに見る悲しきに、おん身一人仏道ならば我が思ひ、重きが上の小夜衣、重ねて憂き目を三瀬川に、沈み果てなばお僧の、受け給へるかひもあるまじ、はや帰り給へやお僧たち』と、小町だけが受戒する恨みを謡うのです。しかし、二人とも戒を受けたらという誘いに、いろんないきさつはあるにせよ、結局二人とも受戒し、『ただ、一念の悟りにて、多くの罪を滅して、小野の小町も少将も、ともに仏道なりにけり』という形で終わります）

（ここで、シテは成仏を妨げる形で登場するという珍しい形式をとっています。いずれにせよ、小町に翻弄された少々の哀れさが印象に残ります）

サ、定家（これは式子内親王に恋した藤原定家の妄執がテーマになりますが、実際の舞台では定家は登場せず、定家の恋の執念にからみつかれる式子内親王がシテとして登場します。

京の千本辺りで僧が雨宿りをしています。そこに前ジテの女が現れ、藤原定家の建てた時雨亭や式子内親王の墓、墓石に這いまとっている定家蔓を教え、内親王と定家の忍ぶ恋と、内親王の死後その墓にからみつく定家蔓の物語を話し、姿を消します。

僧が法華経を読誦すると、墓から内親王の霊が現れ、法華経の功徳によって定家蔓が解けて自由の身になったと喜び、報恩のために舞を舞うが、姿の醜さを恥じて墓に戻ると、再び蔓に被い隠されて埋もれたように消えます）（内親王は『我こそは式子内親王、これまで見え来たれども、まことの姿はかげろふの、石に残す形だに、それとも見えず蔦かづら、苦しみ助けたまへ』と僧に願うと、僧は、法華経の薬草喩品の一節『仏平等説一味雨、随衆生住所受不同』と唱えます。するとかづらは解けだしたのか、内親王の霊は『一味の御法の雨の滴り、皆潤いて草木国土、悉皆成仏の機を得ぬれば、定家かづらもかかる涙も、ほろほろと解けひろこれは、足弱車の、火宅を出でたるありがたさよ』と言うように成仏出来たようなのです。そして、その僧の報恩に報いるため、舞を舞い

ますが、結局は『ありつる所に、帰るは葛の葉の、もとのごとく定家葛、這ひまとはるるや、定家葛』となって、墓は再び葛で覆われてしまいます。これは成仏の有難さと定家の妄執のあまりの激しさを両方詠っているのかもしれません)」

d. 夢幻能における主人公（シテ）の情念と妄執

〈いや有難うございました。これだけの能曲を紹介していただくと、なんとはなしに能の世界に少しは触れられた気がします〉

「もう充分ですか」

〈いや本当はまだまだ聞きたいですが、もう私の頭と心がついていきません。それと世阿弥自身の考えや世阿弥と道元の考えの方も知りたいので、次に移って頂きませんか〉

「それはいいですか。私の今した紹介について少し感想ぐらいは頂けないですか」

〈失礼しました。聞きっぱなしにしてはいけません。それでは、少し感想を箇条書き的に述べます。

①シテの様々な情念、妄執、救いの希求、恨み・憎しみ・後悔などの苦しさからの解放など様々な人間の心模様と魂の万華鏡を見る思いがしました

②今一度私なりに整理すると、

井筒の女の切ない複雑な心理（業平への思いと妻の辛さ、幼き恋の切ない思いで)、

夕顔の切ない恋心と命も恋もはかなく消える哀れさ・寂しさ、僧への一途な頼み、

六条御息所の圧倒されるような激しい怒り・憎しみ・源氏への執着、燃え盛る嫉妬とプライド、孤独ですさまじい愛の執心、無念・妄執、切ない孤独感、

玉蔓における乱れ狂う恋の妄執、

浮船のまさに浮船のように二人の男の間を漂う苦しさ・辛さ・涙川、

江口の遊女の儚さと煩悩、

和泉式部の昔を恋しく思いつつそれを恥ずかしがる心情、

そして今度は男性側の

深草少将の真面目さ・真摯な恋心、小町の気まぐれに翻弄される少将の妄執、美貌の才女の驕慢さに対する激しい恨み・怒り・無念さ・苦患、

定家の内親王に対する地獄を思わせるほどの妄執、といったことが印象に残りました。本当に人間なら誰しも持ち、誰しも陥る執着地獄を見る思いです。それとまさに今私が毎日取り組んでいる患者・クライエントの苦しみもこの妄執地獄に由ると思います。

③そこでこれらの妄執に苦しむ人間や霊を救うものとして、ワキである僧が登場して、お経を唱えたりして救おうとします。心の病の治療者の役目を旅の僧がしているのだと思います。

④それと僧の読誦するお経に法華経が多いのも興味をひかれました。法華経は私の大好きなお経ですし、また道元も法華経を深く尊重していたと聞いています。

⑤ただ、この僧の読経や法華経の功徳があるにもかかわらず、全員が救われているとは限らないということです。定家のように、定家蔓の妄執が再燃しているものもあります。ここは不思議です。
⑥それと一番心を惹かれるのは夢幻能という存在です。だいたいムゲンノウという響きそのものを聞くだけで胸がときめきます。この夢幻能についてもっと知りたいです。
一応、感想としてはそんなところです〉
「まあ、ごく常識的な所感ですが、今挙げた問題を深めようとすると大変ですよ。いずれにせよ、
①シテに何故妄執大きい人物を取り上げたのか、
② 救われるとはどういうことか、
③何故救われる人と救われない人がいるのか、
④ 妄執と普遍的無意識の関係は?
⑤旅の僧は、その当時の治療者と考えていいのか?
⑥当時の人は何に苦しみ何に病んでいたのか?
⑦世阿弥と法華経、道元と法華経、世阿弥・道元・法華経を貫く赤い糸は?
⑧禅家は法華経をどう考えていたのか?
⑨当時の人にとっての法華経とは?
⑩日本人の心の歴史にとっての法華経とは?
⑪夢幻能とはそもそも何なのか?
⑫夢幻能はどうやって成立したのか?
⑬何故救いは夢幻能の形式を取るのか?
⑭夢幻能の魅力とは?
⑮夢幻能と無意識、夢幻能と心理治療の関係は?
　といったことはすぐに問題として浮かんできますね」
〈それらが勉強できるとすごく嬉しいです〉
「ただ、残念ながら今回は全部は話せません。私の方にも準備がないからです」
〈それではせめて当初の道元と世阿弥の関係だけでもお話ししてください〉
「そうですね。そろそろ本題に戻りましょうか。ただ簡単に道元と世阿弥と言いますがどちらも大巨人で、私などはほんの断片と表面だけをなぞって、それに治療者の経験を少し交えて話させて頂くぐらいですよ」
〈それでいいですから是非お願いします〉
「あなたは気楽でいいですね。質問を適当にしているだけで」
〈まあ、そう言わずに、この春鹿に免じて。といっても随分少なくなりましたが・・・〉
「ということで、じゃあ、酔狂談義とでも行きましょうか」

〈是非お願い致します〉

４．世阿弥について（世阿弥、道元、心理治療）

ａ．風姿花伝（花伝書）について

ア、風姿花伝の概要

「それでは、世阿弥の生い立ち、人柄、歴史などはひとまず置くとして、世阿弥の書について見ていきましょうか。まず取り上げるのは、『世阿弥十六部集』の筆頭に挙げられている『風姿花伝』からで、俗に『花伝書』の名で知られている有名な能楽芸術論の第一に置かれるものです」

〈『花伝書』、実は『風姿花伝』という本はどんなものなんですか。実は昔買ったきり積んだままで読んでないんです〉

「そういう方が多いようですが、まあ、買っておくだけでもいいですよ。『風姿花伝』は能楽の芸術論を述べた秘伝書で、父観阿弥の教えを祖述したものです。内容は、序文に続いて

第一年来稽古条々

第二物学条々

第三問答条々

第四神儀云

第五奥儀云

第六花修云

第七別紙口伝ということになっていますが、もうすこし詳しく言うと七歳から五十歳ぐらいまでを七期に分けて稽古の仕方を論じ、物まねとして女、老、直面、物狂、法師、修羅、神鬼、唐事に分けて述べ、演能の注意、芸の花の工夫を追及しています。また能の歴史と家芸の尊厳などから、能作論、幽玄論に及んでいます。後、暫時、世阿弥の能楽論集を紹介していきますが、体系的な紹介はとても無理で、治療者である私が印象に残った事を述べるだけにとどまるのでその点はお許しください」

イ、風姿花伝の序について

［歴史の大切さ］

「ここは能、つまり申楽能の歴史を述べた点と、稽古の重要さが印象に残りました。物事や芸事、宗教や癒し、煩悩・妄執や病気、等は全て多くの因と縁によるものであって、それを述べるにはその因縁・成り立ち、即ち歴史を説明するのが自然です。

心理治療においても、まず患者・クライエントの歴史を知ることで、クライエントの現在がわかり、現在の理解が未来の推察を助け、適切な対応を探れるのです。また心の癒しの歴史を知ることで、現在の我々治療者の営みの意義もわかってくる訳で、心理治療学にとって歴史の研究は極めて重要だと思われます。

道元も同じで、『伝衣』『嗣書』『仏祖』などに特に出てくるように、釈迦如来から達磨大師をえて如浄、道元へと至る仏道の歴史を連綿と説いています。これは、何も道元、世阿弥、治療者に限らず、どの道を営む人にも言えることでさして珍しいことではありませんが、歴史好きの私故、少し当たり前すぎることを言わせてもらいました」
〈いはゆる温故知新というやつですね〉
「そういうことです」

［稽古と行、繰り返しの重要さ］

「ただ、この序ではそれよりも極めて大切なことが述べられています。それは、序の最終行『稽古は強かれ。情識（諍識）はなかれ』という個所です。　私はこの言葉に接した時、思わず身が震えたことを思い出します。

ここの意味は『稽古は強く熱心でありなさい。そして単なる知識故の高慢心や強情等の感情を無くしておきなさい』という意味にも取れるし、「とにかく稽古だけには強くなりなさい」「稽古の辛さに忍耐強くなりなさい」ともとれますし、また「自分勝手な感情や見識は無くしておきなさい」とも取れます。次に、情識は諍識（争う心）ともとれるので「変な競争心や争い心は持たないように」という意味にもとれます。

ただ、私にとってはどんな意味でもかまいません。この『稽古は強かれ』と極めて力強く言い切っている所に深い共感を覚えるのです。

何でもですが、私の好きなテニス・ピアノ・囲碁、全てにおいて、そしてこのゼミの中核を成す治療学にも十分に言えることです。

即ち、それらに上達するには、何球打ったか、何曲弾いたか何時間練習したか、何局打ったか、そして何人のクライエントに会ったか、何千時間・何万時間の面接をしたか、といったことが上達の基になるのです。

いわゆる「小さいことの積み重ね」「繰り返しの技・業の堆積」が、きわめて重要です。もちろん、それだけではなく、雑な打ち方・弾き方・聞き方をせずに常に初めて一回限りだとおもって、大切に丁寧に打ち・弾くことが肝要であることは言うまでもありません。

また、それらを見守り、厳しくしかし暖かくけれども手を抜かない良き指導者につくことも大事です。良き指導者無くしては残念なことに、折角の稽古が無駄になるやもしれません。だから、何かの稽古をしようと思ったら良き先生を探すことです。これは結構難しいことです。良き指導者は忙しいことが多いので最初は相手にもしてくれないかもしれません。しかし、絶えず絶えず頼み込めば熱心さが通じて入門を許されるでしょう。指導者探しも稽古の大事な要素です。治療に関して言うと、良き師につくことは、クライエントに対する重大な責任の一つかもしれません。

この稽古が、道元の言う『行』と同じであることは明白でしょう。道元も徹底して、

『行』の大切さを説いたのは、前にも述べた通りです。道元と世阿弥はここで完全に繋がります。

日常、繰り返す行は本当に大切です。体が覚える、体に染みつく、忘れようと思っても忘れられないほど体に刻みこまれてしまう。心理治療を少しでも経験し、もっと役立つ治療者になりたいと思っている人は、当然というように思ってくれるでしょう。

これは脳科学の観点からも言えることです。玉を打てる、ある部分を弾ける、これは脳のある種の神経回路に組み込まれるということです。治療面接体験も同じです。神経回路に組み入れられるまでは大変ですが、一旦組み入れられると容易なことでは忘れることはできません。

ただ、これだけ道元や世阿弥が稽古や行の大切さを説いたのは、それを忘れる或いは嫌がる人が多いからでしょう。それは、人間が繰り返しを嫌がることにあるのでしょう。繰り返しを嫌がるのは、繰り返しの本質、繰り返しの貴重さ、繰り返しは単なる繰り返しではなく創造に通ずる道であることを知らないからだと思われます。また『面倒くさい』という情（感情）や『そんなことはわかっている』といった識（知識）が邪魔をするのでしょう。

繰り返しはとても大切です。キルケゴールが『反復の大切を知らぬ者の人生は悲惨である』といったように西洋キリスト教社会でも、繰り返しの貴重さが説かれています。

繰り返しは単なる繰り返しではありません。テニスの練習をしていると、繰り返しのように見えて、一球一球全部違います。一見単調に見えるフォアハンドの打ち技でも一打一打全部それなりの個性を持っているのです。かく言う私のテニスはとても下手くそですが、下手は下手なりに『これが唯一無比の一打だ。これが最期の一打だ』と思って大事に打つことを心掛けたいと思います。

ちょうど、道元が『(一息の）心を臨終と定むなり』といったように、一球一打は最期の一球一打なのです。これはピアノでも碁でも同じで、同じ曲を弾いたり、似たような局を打ったりしていても、それぞれ全部違っていて、一つ一つが個性の輝きを持っているのです。

治療面接では、もっとこのことが言えます。私は少なく見積もっても一万五千人の患者、二千人のクライエントに出会っていると思いますが、同じような人、同一の悩みのように見えて、全部違います。彼ら一人一人がそれなりの深刻なしかし貴重な苦悩・歴史を抱えています。また一回一回の面接も同じような繰り返しの話が出てきても、やはりその時々で全部それなりの個性を持っているのです。

従って、それぞれの営みは、一見繰り返しのように見えて実は、微妙に違っているのです。この微視的視点を持つことは、治療実践の上でも、何かを学ぶにしても、非常に重要です。繰り返しの貴重さを知ること、繰り返しの中にある微妙な変化を読み取るこ

とこそ治療や多くの学びを味わい深いものにし、人生を楽しくさせるのです。

［和歌を学ぶこと］

道元も世阿弥も、仏道芸道に関して、それこそ一道集中、一道魂入のように見えますが、実は和歌だけは例外のようです。

世阿弥は、序の部分で『まず、この道（能楽）に至らんと思はん者は、非道を行うべからず。ただし、歌道は風月延年の飾りなれば、もっともこれを用ふべし。』と書いています。つまり、一にも稽古、二にも稽古、百にも稽古と、あらゆるところで稽古の重要性を説いている世阿弥ですが、歌だけは例外だったようです。

ただ、私はこの箇所に接して、思ったことは、謡いの文句はとても和歌に似ている、いや和歌そのものといってもいいのではないか、ということです。能については殆ど知らない私ですら、謡いの文句の美しさ・心地よさ・リズム感に溢れていること、これはまさに和歌の五七五七七を基調にしているように思えてなりません。

和歌は不思議です。紀貫之が『生きとし、いけるもの、いずれか歌をよまざりける』と説いたように、人は少しものを思っただけでも歌に表現したくなるものです。万葉の昔から恋の歌が多いのはとてもうなづけるところです。しかも和歌の効果も絶大です。

貫之は続けて『（和歌は）ちからをもいれずして、あめつちをうごかし、目に見えぬおに神をもあはれとおもはせ、をとこのむなのかをもやはらげ、たけきもののふの心をもなぐさむるはうたなり』というように、人は勿論、神や霊にまで影響を与えるとしていますが、至極当然といえます。

私も歌を一度も習ったことがないのに自然に特に人との交わりや治療関係の中で、歌を詠みたくなります。私のは駄作中の駄作の最たるものですが、それでも、うつ病を克服し職場復帰を果たそうとする女性患者に対して『逆境に耐えし君は美しきかな幸多かれと祈らぬばかりを』という歌を贈ったり、また通い続けて良くなってきた方に『初見より微笑みませり君のかむばせ人知れぬ努力ここに花咲く』という歌が自然に出てきます。患者さんが喜んでくれ、それが治療のプラスになるような気もします。

ただ、歌がより感動的なものになるにはそれこそ良き師が必要です。いずれそうした素晴らしい指導者に巡り合う努力をしたいと思っています。何故なら、不思議と歌の効果は大きく、患者・クライエントの改善に役立つこともあるからです。だから、自分の上達のためというより患者さんのためにもと考えています。

それから、もうひとつ言うと、あのまじめ一方の堅物に見える道元ですら（というより道元だからこそと言えるかも知れません）和歌を多く詠み、それらは『傘松道詠』という歌集に集められています。

その中には『春は花夏ほととぎす秋は月冬雪きゑてすすしかりけり』という一見単純明快な歌から『此経のこころをうれは世中にうかかふ声も法をとくかな』というように

世界全仏法というような正法眼蔵の教えそのものの歌もあるようです。さらに、『この心天津空にも花そなふ三世の仏に奉らなむ』といった空華を思わせる歌もあり、また『愚かなる我は仏にならずとも衆生を渡す僧の身ならむ』という謙虚さと決意の歌もあります。

私個人の感想ですが、正法眼蔵より、よほどわかりやすいと感じます。もっとも眼蔵も、和歌の連続だと思えば、理解の道は開かれるのかもしれません。

ウ、風姿花伝第一　年来稽古条々

序に続いて、この第一の『年来稽古条々』では、能役者の生涯を、幼年期・少年期・変声期・青年期・壮年期・初老期・老年期の七つに分けて、それぞれの年代に応じた稽古のあり方を説いています」

［能は花である］

〈ここで、Ａさんが一番感じたことは何ですか〉

「世阿弥が、能の真髄を花であるというようにしている点です」

〈面白そうですね。もう少し詳しく説明してください〉

「まず、世阿弥が花という言葉を使っている箇所を見ていきましょう。そこに私の愚訳と愚見を付け加えていき、それからまた話しあいましょう。」

〈お願いします〉

「まず七歳（幼年期）では、稽古は自由にやらせるのがいいと説きます。

その後、十二、三歳（少年期）では

『（この時期の美しい児姿や声や芸の上手があれば、素晴らしく花やかだが）さりながら、この花はまことの花にあらず。ただ時分の花なり』（この少年期の芸能や花は、まだ真の花ではない。時分の花、即ち一時的な魅力に過ぎない）（能の魅力・真髄を花に例えています。そして一時的な花、または時の利を得ているに過ぎない時分の花と真の花を比較しているのは世阿弥の素晴らしい感覚です。治療においても一時的に良くなったように見える時分の花と、かなり確かに治癒しているという真の花があるように思われます）

続いて

『この頃の稽古、易き所を花に当てて、技をば大事にすべし』（この頃の稽古は、この少年が演じやすいところを美しい見せ場や花に当ててあげながら、しかし、実際の稽古は念入りにする必要がある）（治療でいう波長合わせを感じます。演じやすい所、実行しやすいところが、見せ場や評価の対象になれば、治療の努力もするし、一般に稽古にも身が入り、技も上達すると言えます。テニスでもピアノでも欠点を修正するよりは良いところを伸ばす方が上達すると言われています。治療でも同じでしょう）となります。　次の十七、八歳（変声期）は声変わりの時期で能役者としては一つの困難な時期

に差し掛かったと言えます。
　そこで
　『声変わりぬれば、第一の花失せたり』となるのです（第一の花、すなわち稚児の美しい花の声がなくなるということである）（この困難な時期の乗り越えとしては一重に稽古しかないようです。困難に会えば会うほど、稽古や行を積むと自然に道は開けるでしょう。治療にも同じことが言えるでしょう。）
　いよいよ二十四、五歳（青年期）になると、この時期の芸は引き立って来ますが慢心してはいけないのです。世阿弥は
　『これも真の花にはあらず。年の盛りと、見る人の一旦の心の珍しき花なり』と諭すのです（これも真実やまことの花ではなく、観客が一時的に珍しく面白がってくれるに過ぎない）（一時的な成功・評価に溺れてはいけない、ということなのでしょう。これも治療に言えることで、一時的に良くなったからと言って喜んでいるだけではだめなのです。）
　続いて世阿弥は
　『この頃の花こそ初心と申す頃なるを、極めたるように主の思ひて、はや、申楽に側みたる輪説をし、至りたる風体をすること、あさましきことなり。』と述べます。（この時の花は、まだ初心の花であるのに、この時申楽の道を極めたかのように思って、申楽の本道からはずれたようなことをするのはまことに情けない、あさましくみっもないことである）（これもよく治療者がやることで、早く治療道を極めたと思いやすいことです。不十分なままでいることに耐えられないのでしよう）
　そして世阿弥は
　『わが位のほどをよくよく心得ぬれば、それほどの花は一期失せず。位より上の上手と思へば、もとありつる位の花も失するなり。よくよく心得べし』と結んでいます（自分の芸の能力や芸位がどのくらいかということを正確に認識で来れば、その青年期程度の段階の花は一生保持できる。実力以上の芸の位や能力を持っていると誤認すると、もとから有った花・実力・魅力も消え失せてしまうのでよく注意をすることである）（とても大事なことを言っていますが、自分の位を正確に見定めるのは難しいことです。治療でも同じで、患者・クライエントのみならず、治療者までもが過大評価や過小評価に陥りがちです。しかし、正しい見立ては患者の状態だけではなく、治療者自身にも必要です。正しい状態・能力の判断によって、適切な対応が可能になる訳ですから）
　今度は第五期の三十四、五歳（壮年期）です。ここでは
　『この頃の能、盛りの極めなり。・・・もしこの時分に天下の許されも不足に、名望も思ふほどもなくは、いかなる上手なりとも、いまだまことの花究めぬ仕手と知るべし』と厳しい言葉が述べられます。（この時期を能役者の頂点としています。この時期に、

あまり名声があがっていなければ、真の花、能の真髄・心髄・神髄がわかっていない、ということなのですが、これはこれで一種の現実なのでしょう。人間、努力しても出来ないことはできないのです。治療者もそのことは十分理解して、無理な努力を患者にも自分にも強いたりしないようにしましょう）

第六期の四十四、五歳（初老期）になると

『この頃よりは能の手立て、おほかた変わるべし。たとひ天下に許され、能に得法したりとも、それにつきても、よき脇の為手を持つべし。能は下らねども、力なくやうやう年闌け行けば、身の花も、他目の花も、失するなり』『この頃よりは、脇の為手に花を持たせて、あひしらひのやうに、少な少なとすべし』（世阿弥の時代は、この年齢で初老期だったのかもしれません。いずれにせよ、この時は能の演じ方は変えるひつようがあるとのことです。それは良き脇、助演者を持つということです。そして、その脇に、主役を譲って、文字通り花を持たせることが大事なのです。つまり、控えめに控えめに演ずることが大切です。また能だけでなく、精神治療においても、後継者を育てることが大切になってくるのです）

『もし、この頃までに失せざらん花こそ、まことの花にてはあるべけれ。』となります。（また、この時期までも消えない花を持っている能役者、あるいはそうした能役者の演技こそ真の花と言える。つまり時分の花、一時の花でなく、永遠の花であると言えます）

最後の第七期の五十有余（老年期）になると

『この頃は、おほかた、せぬならでは手立てあるまじ。・・・さりながらまことに得たらん能者なれば、者数は皆々失せて、善悪見所は少なしとも花は残るべし』（この時期になると、控えめにからさらに進んで、もう技も何もしないのが一番いいということになってくる。しかしながら能の真髄をつかんでいる能者は、何もしなくても、花、すなわち何とも味わい深い魅力が残っている、ということでしょう。この点は、治療者と弟子の関係だけでなく、治療者自身と患者の関係においても重要です。治療においての理想の一つは、できるだけ治療者が何もせず、患者自身が自分の力で治っていくことです。治療者の役目は、患者の自助能力を増やすことにあるのです）

『（観阿弥の亡くなった年の五十二歳の能に関して）これ、まことに得たりし花なるが故に、能は枝葉も少なく、老木になるまで花は散らで残りしなり。これ、目のあたり老骨に残りし、花の証拠たり』（亡父、観阿弥の能に重ねて、枝葉の少なくなった老木に花が咲くように、まことに能の本質を極めた能者であれば、花は残るということでしょう。いや、老木に花が咲く方が風情があるやもしれません）」

［花とは何か？］

「以上、世阿弥が、第一の『年来稽古条々』で述べている、『花』に関する主要部分

を抜き出し、勝手な感想を加えさせて頂きました」
〈いや、面白かったですが、まだ少し未消化です。いずれにしても世阿弥や能者にとって「花」はとてもとても大事なものだということが実感できました〉
「最初は感覚的にわかるだけでいいと思いますよ」
〈それはそうと世阿弥は何故こんなに花を重んじたのでしょうか〉
「それに答えるにはまず、花とは何か？人間が花に抱く思いとは？花と人間の関係は？花に関して日本人や日本文化はどういうイメージをもっていたのか等多くのことを考えねばなりません」
〈是非お願いします〉
「やれやれ大変なことになって来ましたね。まあ、いいでしょう。私の勉強にもなりますし。まずは花の定義から行きましょうか、辞典を引けば一応『花』とは、
『種子植物の生殖器官。
一定の時期に枝や茎の先端などに形成され、受精して実を結ぶ機能をゆうするもの。
有性生殖を行うために葉と茎から分化したもので、花葉と花軸からなる
花葉は普通、萼（がく）・花冠（花弁花びらの集合）・おしべ・めしべに分化して、花の主体を形成する。
形態上の特徴は分類上の指標となる。』
となっています。
花は『化』という字の上に『草冠』が付く訳ですから、変化する植物としての意味合いが花に盛られていると思います。
英語の flower，フランス語の fleur は、古代ローマの花の女神フローラと関係します。フローラ神は、春と豊穣の女神でもあり、彼女の祭りは性的に放埒になるとのものです。」
〈こういうように定義や語源を聞かせて頂くといろんな連想が湧いてきますね〉
「ではついでにどうですか。平均的日本人の代表であるＱさんの花に関する連想を聞かしていただけませんか。私の連想も広がりますので」
〈思いついたままを箇条書きにしてみます。
①まずは美しさ、綺麗さ、可愛らしさを連想します。以下
②華やかさ、目立つ存在（特に女性に多いが、男性にも使われる）
③何かの、特に努力の結果、成果（花開くという表現）、努力目標
④良き香
⑤軽やかさ
⑥自然美の代表（花鳥風月）
⑦桜という一定の花（和歌で花といえば桜の花である）

⑧女性を指す（社交界の花、両手に花）
⑨魅力・能力（花のある人）
⑩白色に例えられる（雪の花、波の花）
⑪カルタ、カード（花札）
⑫面白さ、興味深さ（ここが花だ）
⑬女性器（特に花びらは、小陰唇に例えられる）
⑭何かを生み出す原動力（花が実を結ぶ。花は生殖器官でもある）
⑮人生の良い時期（今が花）
⑯はかなさ、しおれやすさ、散り易さ（夕顔、桜散る、花の色は移りにけりないたずらに我が身よにふるながせしまに）
⑰華道、生け花
⑱仏道に関係（供養の花、花まつり、法華経・華厳経）
⑲恋愛、愛情にまつわること（ひと花咲かせたい）
といった連想がうかびました〉
「だいたい、そんなところで落ち着くと思いますが、私も聴いてて参考になりました。」
［花の象徴］
〈今度はＡさんの連想を聞かせてください〉
あなたがあらかた言いつくしたので、重なることが多いかもしれませんが、主に象徴という点から『花』にアプローチしてみます。まずは
①美を表す。花の美は最高の一つかもしれない。花は和歌、文学、絵画、音楽などあらゆる芸術家が主題としたものである。花あるおかげで、我々は美や芸術を楽しめるのである。
②祝典、喜びを表す。お祝いに花を贈られると本当にうれしいものである。③移ろいやすさ、はかなさを表す。美や喜びは長く続かない。無常なのである。
④芽生え、交配、死、再生といった生き物の周期を表す。ちなみにこれは治療の周期そのものである。
⑤花床は墓を表す。しかし、この花は安らぎの花である。
⑥意志や感情の伝達（人に花を贈ることで）
⑦美徳、善良、純粋さ、愛情などを表す。しかし、西洋の花の代表である薔薇には棘がある。これは美徳や愛情はたやすいことではなくて『愛は困難である』ということを示しているのだろう。
⑧神秘や神秘の中心を表す。宇宙の不思議な連関も見れるかもしれない（野の花に天国を見る）
⑨地上の星や勝利を表す。

⑩誘惑や不誠実を表すこともある。
⑪愛（特に女性の愛）、陰門、処女性を表す。
⑫女を表し、『花―女』と『果実―男』と対照を為す
⑬魂の祖型を表す。
⑭均衡、正義を表す。
⑮全宇宙や曼荼羅を表す。
⑯善行、慈善行為の結果を表す。
⑰錬金術では『天の花』を表す。
⑱花摘みは、性行為と同時に無垢な喜びを表す。
⑲赤い花は情熱、白い花は純潔を表す
⑳女神（ヘラやアルテミスなど）や聖母マリアの持ち物を表す。
２１喜び・快楽を表す。
２２季節はずれの花は、不吉さを表す。
２３花全体は『受動的原理』の象徴、花のガクは盃のように天上の活動の受け皿である
２４魂の美徳を表す。
２５愛と調和の象徴
２６愛と調和の象徴
２７幼年期の象徴
２８金華、黄金の華は、霊的状態への到達
２９生命の霊薬
３０中心への回帰、
３１統一と原初状態への回帰
３２エーテル
３３生け花、華道における精神的態度。完璧で即興の芸術として感情と意志を伝える。
３４植物や周期のエンブレム
３５生命の儚さ３６花の生け方で、上部の枝は天、中間部のそれは人間、下部のそれは大地を表す
３６心の安定の象徴、
３７人生、美、悦楽の短さ、儚さとその不滅性のコントラスト、
３８魂の原像、霊的中心
３９春やあけぼの
４０青春、美徳といったところでしようか
４１蕾は生命の誕生・始まり」

［世阿弥が花に託したのは自然］（能も治療も、目的は花の追求）

〈今の話を聞くと花は全てを表す、特に大事なものの象徴という感じがますますしてきました〉

「だから世阿弥が能の魅力・能の目的を花に置いたことがおのずとわかられると思います。それに能だけでなく、花は人生の目的そのものです。病気になっても癒しが花になりますし、たとえ治癒に至らなくても癒しの努力そのものが花に例えられると思いますし、老いても死の間際になっても、あるいは死んで向こうの世界に行っても、人間や霊魂は花を追究すると思います」

［道元と花］

〈能も治療も人生も花の追求が目的であるということはわかりましたが、道元にとって花はどんな存在なんでしょうか〉

「さきほど道元の和歌を紹介したように道元は実に花に親近感を持っているようです。以下、道元の花に関する歌を挙げてみます。

　春風にほころひにけりももの花枝葉にわたるうたかひもなし

　いつとても我ふる里の春なれば色もかはらず過ごし春哉

　春かせに我ことのはちりけるを花の歌とや人の見るらん

　梓弓春の山風ふきぬらむ峯にも谷にも花にほひけり

　花もみち冬のしら雪みしことも思へは悔し色にめてけり

　といった具合です」

〈いい歌ですね。正法眼蔵よりよほどわかりやすいし、道元の心情がすなおに伝わってきますし、何よりもきれいですね〉

「たしかにそうですね。でも道元も先に挙げた空華の巻だけではなく、いくつかの巻で華を取り上げています。例えば

『渓山声色』（「桃花を一見してより直ちに至る永遠の今、疑惑の名残りさらになし」というように桃の花を見て悟りを開いたエピソードが載っている）

『法華転法華』（法の華、ダンマの華が開くことが力強く記されている）『梅華』（『いま開演ある老梅樹、それ太無端なり、忽開華す、自結果す』というように師如浄に開かれた老梅樹がまさに端や切れ目なく続き、たちまち華開いたかと思えば、自然におのずから実を結ぶ、結果をだす、と道元は美しく詠うように説いています。この梅華が法の花であり、仏道修行の華であることは明白です。治療華もこうありたいものです）

『優曇華』（釈迦が法の真髄を示すのに、優曇華の花を捻って示したという故事を引き、拈華によって法の心を示そうとしている）といった具合です」

〈わかりました。世阿弥でなく道元にとってもさらに治療や人生においても花は大事

ですね。いずれ、ゆっくりと道元と花について教えてください〉
「そうですね。私も勉強しておきます」

エ、風姿花伝第二　物学条々

〈今度はまた花伝書に戻って、花がどう取り上げているのか教えてください〉

［物まねとは独創的］（物まねとは真実に至る道）

「次の第二『物学条々』では、能芸の根本たる『物まね』（ある人物に扮してその姿態・行動を舞台上に再現すること）のあり方を九類型（女、老人、直面、物狂い、法師、修羅、神、鬼、唐事）に分けて説きます」
〈ちょっと口を挟んで申し訳ないですが、物まねというと猿まねなどとか、それは真似事であって本物でないとか言うことが連想されて、低級なような印象を持ってしまうのですが?〉
「確かに、表面的に考えればそうかもしれませんが、真似るとは『真に似る』つまり『真に近づく』ということで、真実に至る道ですよ。まず、物事の習得は何でも真似ることから始まるのです。それから独創的なことをオリジナルと言いますが、このオリジンという言葉はもともと『神に似せる』という意味なのです。つまり、独創的というのは神様の真似をしている訳です。だから、世阿弥の能芸・物真似は、こうした九類型の中に宿る真実・神性を表すことにもなると思いますよ」
〈そう言えば、患者に治ったふりをしなさい、というように指導していると、本当に治っていきますよね。それにホロヴィッツやアガシの真似が出来たら、それはもう超一流のピアニスト、テニスプレーやということになりますね〉
「おっしゃる通りです。たから、真に真似るというのは大変なことなんです。そしてもうひとつ思ったことは、どう真似るかという所にその人の個性が発揮されるのです。その意味では、すべては本歌取りで、どう真似るか、どう本歌を取るかで其の人の独創性が試されているのかもしれません」
〈それで世阿弥は真似ることについてどう言っているんですか〉
「世阿弥は『物まねの品々、筆に尽くし難し、さりながら、この道の肝要なれば、その品々を、いかにもいかにもたしなむべし。およそ、なにごとも残さず、よく似せんが本意なり。しかれども、またことによりて濃き・淡きを知るべし』（物まねや劇の演技は種類が多すぎて、言葉では説明しがたい。しかし、物まねや演技は能の道の根本であり、本質であるので、それぞれの種類を十分に味わい、吟味し、研究・練磨せねばならい。だいたい、能や物まねや演技においては、どんな対象も漏らさずことごとく隅々まで似せるというのが本筋である。しかし、同時に似せる対象によって、濃くしたり淡くしたりして、その濃淡の程度を考えねばならない）と述べています」
〈こうなってくると、真似るというのは大変なことですね〉

「大変なのは当然です。それは能に限らず、仏道でも、他の芸道でも、治療道でも一番肝要な点で、人生の一大事でもあるのです。考えてみればわかるように、我々は生まれおちてから、父母や同胞や友人や恋人や師匠やそして敵からでも、いろいろに真似て今日まで生きてきているわけでしょう。そして正しく良く真似ることが出来ない場合に、心の病を初め多くの困難・不幸に巡り合うのです（広範性発達障害においては、もともと真似るための根本であるミラー・ニューロンに障害があると言われています)。ただ、その場合でも良き治療者に出会い、それをよく真似ることで癒しの道が開かれる訳です」

〈私も患者に真似られるような良き治療者になりたいものです〉

「ただ、治療者の方も患者を真似ることが必要ですよ。自分の真似をちゃんとしている治療者を見て、患者は己の姿を見ることができるのです。そして患者は己の長所や欠点、課題を見出していくのです。続いてそれを通じて正しい安らかな生き方とはどういうものかを学んでいき、癒されていくのです」

〈いや、その患者を真似るということそのものが今の私には難しいです。それで、次は早速、世阿弥の言う物まねの具体例を教えてください〉

「本当は、そうしたいと思いのですが、もう夜が明けてきたので、この辺で一時終りにして頂けませんが?」

〈えっ、突然そんなことを言われても・・・〉

「別れはいつも突然ですし、出あいや始まりは偶然です。しかし、突然や偶然は必然でもあるので、いずれ、また再開したいと思います」

〈まさか、私がくだらない質問ばかりしたので、嫌気がさされたのではと心配です〉

「それもあるかもしれませんね」

〈えっ。それは大変失礼しました。・・・〉

「冗談ですよ。忙しくなってきたことや、他にせねばならない用事が増えてきたこともあるし、もうすこし、世阿弥や道元の勉強を私もしなければと思ったので、ということですね」

〈もう、これ以上、無理はさせません。そして、私もちょっとは勉強しておきます〉

「いいですね。付録として、今後再開した時に話しあうためのテーマを沢山用意しておきましたので、がんばってください」

〈わかりました。出来る範囲で頑張ります〉

　ということで読者には申し訳ないが、ここで一時中断させていただく。このあと、もちろん機会を見て再開させて頂く。治療ゼミ通信第何号になるかわからないが、それまで、また勉強し、エネルギーも貯めて置く予定である。最後にわがざれ歌をいくつか。

道元と世阿弥は遥か遠くにいましとも我数歩たりとも近付きたし
麗しき花に誘われ深入りす森の奥にて迷ふ我かな
現にてかなはじ出会い夢にこそ現れ出でたる二峯なりしか
花求めさすらふ我を支えしは聞き手の素直さ有難しかな
秋の夜の夢路に立てり観音様我が行く道を照らし給へり
花求む道は如何に険しとも癒し一筋我は行くらむ　　（一時の完）

［今後の予定］
風姿花伝第二　物まね条々

・女（仕立て・扮装の重要性と顔の保ち方）
・老人（年功をつんだ熟達者に似合う芸。品位ある老人の至難さと、老木の花の必要）
・直面（能面を着けない姿。青年・壮年の武士）
・物狂い（面白さのあふれる芸。物まねのすべての種類に通じる。霊が憑依する狂いと物を思いつめる狂乱の狂いがある）
・法師（脇役）修羅（死後に修羅道に落ちた武人の霊の物まね）
・神（脇能に多く登場する神について、鬼との差を説き、扮装を重視する）
・鬼（怨霊・憑物の鬼と冥土の鬼）
・唐事（中国人の物まね）

第三　問答条々

・能の吉凶予知とその対策（陰陽和合の道理）
・能の序破急（起承転結との関連。治療も序破急、起承転結が大事）
・立ち会いの手立て（勝負に勝つ方法）
・若き為手の花と、古き為手の花（まことの花の獲得の必要）
・上手は下手の手本、下手は上手の手本（治療者も患者から学ぶことが多い。相互研鑽）
・位の差別（芸位には、稽古の位と天性の位がある。幽玄と長・品格）
・文字に当たる風情（謡の文句と所作との関係、音曲・はたらき一心の境地）
・しおれたる風体（花よりも上で、しかも花に基づくものとする。しおれたる風体は大事だが、極めて難しい）
・花は心、種は態（普通は心が種となって態として花開くと考えがちだが、真実はわざ、態、技術といった身体的条件によって、能の花、能の心が花開くのである。心、心と言っているだけではだめで、何より稽古・身体的修練が必要で、音楽・スポーツだけでなく、治療にも通じる）

第四　神儀

・申楽の歴史について

奥儀

・風姿花伝述作の趣旨と書名の由来（心より心に伝ふる花）
・近江猿楽・田楽など十体にわたるべし（すべての風体をきわめること。面白しと見るは、花なるべし。治療でもどんな心の病にも対処できることが大事）
・衆人愛敬と寿福増長（能も治療も相手を楽しませ、楽にすることが大事。初心忘れじして、能を行うことこれ寿福なり。正直円明にして、世上万徳の妙花を開く因縁なりとたしなむべし。治療においても初心は大事だが、この初心とは何か）
・跋文・奥書き

花伝第六花修

・能を作る上での基本方針（本節正し、めずらしき風体、詰めどころあり、幽玄ならん）

・作者の分別―音曲と風情（音曲・はたらき所作一心になる稽古あり）

・強き幽玄と弱きと荒き

・為手と能の位の相応と「能を知ること」（治療者も自分の能力と位を知る必要がある）

花伝第七別紙口伝

・花を知ること（花と面白きと珍しさ、これ三つは同じ心なり。治療の花も同じである。）

・具体的な演技をめぐる花の論（常よりも面白き。一回一回の面接は新鮮である。曲といふは節の上の花なり。治療者の語り口も大事）

・「似せぬ位」と老い木の花

・十体と年々去来の花（あらゆる風体を知ること。年齢に連れて身に備わる芸の大事さ。治療において「熟する」とはどういうことか。「年々に去り来る花）

・住せぬための用心（治療における「役立つ住」「魂のこもった停滞」とは?）

・秘すれば花（秘密は能においても治療においても何故大事なのか。秘密の意義の追求）

・因果の花（男時と女時。治療における陽陰の時とは?信あれば徳あるべし）

・人々心々の花

［音曲声出口伝］

・一調・二機・三声

［至花道］

・二曲三体の事（二曲とは歌舞なり。謡と舞の大事さ。聴く・見るは基本。三体とは、老体、女体、軍体のこと。何やら、老賢者・アニマ・アニムスの元型と比較してみたくなる）

・無主風（有主・無主の変わり目を見得すべし）

・蘭位のこと（上手の究め至りて、蘭けたる心位。治療における蘭位とは何なのだろうか）

・皮・肉・骨事（見は皮、聞は肉、心は骨）

・体・用事（体は花、用は匂ひ）

［人形］